家庭・保育所・幼稚園

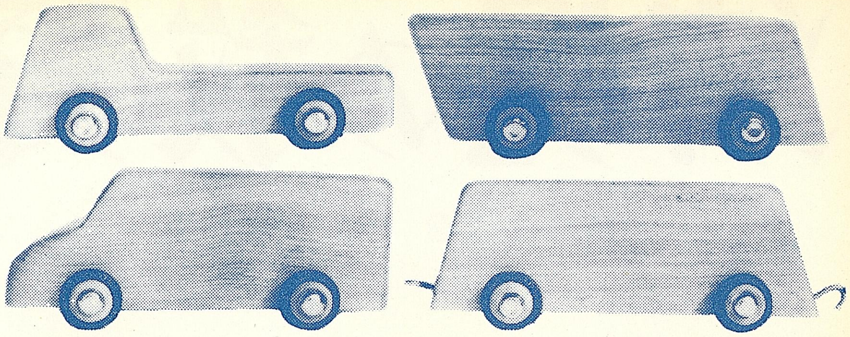
幼児の教育

第六十四巻　第十号

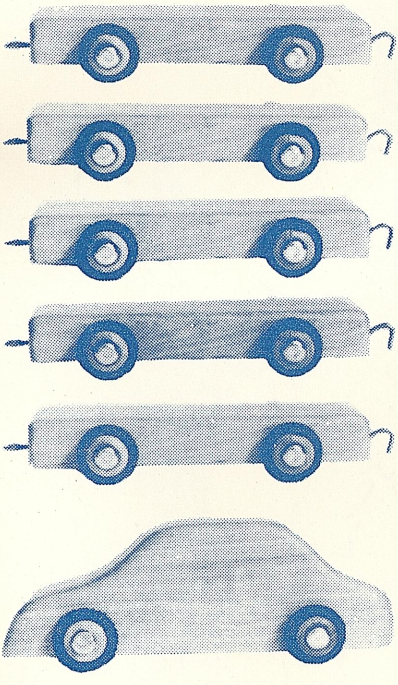
⑩

日本幼稚園協会

１セットで　こんなにいっぱい



新・のりものセット



子どもの夢をのせて走る
新しい遊具です……

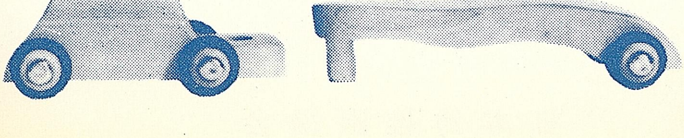
●想像力を伸ばし、遊びの発展性を豊かにするために、スッキリとした形にデザインしました。

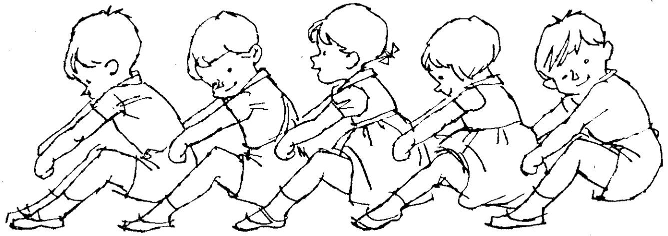
●木片を切り込んだり削ったりして、のりものの形に作ってありますから、堅牢で、感触がよく、しかも安全です。

●木製の素朴な美しさを強調してロウで磨いてありますから、積木と併用すると効果的です。

定価１セット（７種11台）1800円

発　売　　フレーベル館





幼児の教育　目次

――第六十四巻　十月号――

表紙　水沢　決

倉橋先生の思想と生活……………………及川ふみ…（2）

倉橋惣三と誘導保育論

倉橋惣三の幼児教育論の紹介……………津守　真…（9）

☆初期の誘導保育の実際……………………………（26）

モンテッソリー断想……………………………内山憲尚…（33）

二才児の生活と保育

教材やカリキュラムの観点から……………久富御治代…（41）

幼稚園における科学的あそびの指導…………山本泰子…（52）

倉橋先生の思想と生活

及川ふみ

今年は倉橋先生の十年祭を迎え、先生の追想話を入れようという講習計画を伺い、先生と長くご一緒におりました一人として本当に先生の業績を考える時期として、大変うれしく思いました。

私は大正五年から比較的側近におりまして先生の指導を受けたのですが、先生が周囲の者を指導なさいますのに、子どもを育てる気持ちと同じく「自分から育つものを育てるのだ」ということで、外から積極的に教えられたということは少いので、この「倉橋先生の思想と生活」という演題をいただきまして少し当惑いたしました。

そして一か月ほど前から先生の著書を順々に朝に晩に読み直してみたのでございます。先生とは長くご一緒におりましたが特別の席を設けて、幼児教育についてのお話をすることは割合に少なくて、むしろこのような機会（講習会などで）にみなさんと講堂で一諸に聴くということのようでしたので、あらためて自分が先生の著書により、勉強しなければならないはめになったのです。

そこで先生の著書をひととおり上げますと、昭和六年に「就学前の教育」（岩波講座　教育科学の一部）が出ています。これは先生の幼児教育の思想がよくまとめられ、理論的に書かれています。私はこの「就学前の教育」が先生の幼稚園教育の理論についての参考になったと思います。その後昭和九年に「幼稚園真諦」をお出しになりました。又昭和十一年に「育ての心」昭和二十九年に「子供讃歌」その前に大正十五年に「幼稚園雑草」が出ております。「幼稚園真諦」「育ての心」は実際の教育の計画とか方法についての先生の意見が表わされているようです。「子供讃歌」は先生の旧制の高校時代から晩年までのことを書いておられたもののようです。これは「倉橋惣三選集第一巻」に載っていますが「就学前の教育」をおまとめになった経過がよくうかがわれます。「子供讃歌」の目次は、㈠白線帽の青年①お茶の水幼稚園の兄ちゃん②メドウ・キンダーガルテン③最初のペスタロッチ伝、㈡角帽生の子供遍歴、㈢子供道

楽、㈣絵の子供、㈤保育理論研究者、などであります。この中で最初のペスタロッチ伝､先生はこれをよくお読みになりまして､大変感銘深くされています。これは高校時代のことです。また㈤の保育理論研究者の中の「古い書庫」はお茶の水幼稚園の古い書庫のことです。先生は明治四十三年頃女高師の講師になられました。そしてその前は学生として心理学の研究生、その後児童心理学の研究生として専門の心理学の研究のかたわら、研究の材料とするためにではなく大変子どもがお好きであったため、大学の行き帰りにいつも附属幼稚園にきて、子どもと遊んでいらっしゃったのです。

それがたまたま女高師の高師におなりになり、今度はご自分が遊ぶための幼稚園の遍歴というよりも、むしろ実際のみじかな必要なことにもなって、幼稚園にもしばしばいらっしゃったのです。講師でしたので幼稚園には直接ご関係はないのです。当時女高師の四年になりますと先生の児童心理学の講義がありました。先生はお話が上手で、ききほれてしまうことが多く、ノートをとる暇が全くないような状態でした。このように先生は講師でしたのでいつも附属幼稚園には出入りしていらっしゃったわけです。

大正五年私が幼稚園に就職いたしました頃、先生が幼稚園の職員室のソファーに腰掛けて本を読んだり幼稚園の子どものことをお話ししてらしたのをよく思い出します。とにかくその頃は先生は大いに必要にせまられたと申しますか、趣味で子どもと遊んでいる段階から今度は少し本格的に子どもを研究しようというようなお気持ちで、幼稚園の園舎の奥の方にあった、本当にカビ臭い一室に沢山古い書物が入っていて、この古い書庫の中にいちいち研究なさる材料がありまして、それには、先生と共著で新庄先生がお書きになった幼稚園史によくかかれていますが、明治のはじめの幼稚園の翻訳書が書庫に沢山あって、これを先生がひきずり出してはよくお読みになったのです。そうしているうちに翻訳書ばかりではいけない、原典をよく調べ、本当のフレーベルの保育精神をつかまなければならないというようなことから、フレーベルの研究にお入りになったわけです。これは「フレーベル」としてこの著書の中に詳しく出ておりますが、とにかく先生の幼稚園教育の思想の大きなもとはペスタロッチとフレーベルによるところが大きいのです。

ところがフレーベルの原典を読み、フレーベルの幼稚園教育の精神を把握し、その後外遊なさってフレーベルの研究所遺跡をお訪ねになられたりしておりますが、その前に原典をお読みになって以来、今フレーベルの流れをくんでいる世界中の幼稚園の行き方が本当のフレーベルの精神を忘れて、枝葉にわたった保育形式をとっているということを大変疑問に思われ、これは何とかしなければならないという気持ちをもっていらっしゃったのです。

当時の附属幼稚園主事の安井哲子先生と学習院幼稚園主事の野口ゆか先生が、いつも倉橋先生を囲んで本当のフレーベルの精神を聴き､幼稚園教育のあり方についていろいろと研究してましたが､当時まだ倉橋先生は自分が考えたことをすぐ実践に移すというのではな

く「だれかが、それを実践すればよい、そうすれば自分がうしろからこれを後おしする」というように直接行動に出るということをさしひかえるというお気持ちが先生のどこかにあったように感じるのです。そういうことから二人の先生に新しい幼稚園原理、フレーベルの本当の精神をつかんだ保育精神をおっしゃりながら「実践はあなたたちがして下さるんですよ。」というような様子でした。けれどもやはり今の幼稚園のあり方はなんとかしなければならないとは考えても、実践に移すという段階になると躊躇なさることが多かったのです。「子供讃歌」の中にも書いてありますが、この幼稚園の古い書庫あるいは幼稚園の保育室中にあっては、どことなしに自分の疑問になっているフレーベルの精神からそれた保育がそのままただよっている。しかし庭に出ると幼稚園の庭は広く、大きな木もあり広い藤棚もあり、その下には砂場があり、子どもが自然の生活をしている。このように戸外では多いにフレーベルの本当の精神をつかんだ子どもの生活状態であり、一歩部屋に入れば精神をまちがった枝葉にわたった抽象的、概念的形式主義の保育が行なわれているというので、先生の気持ちは、はっきりしない状態だったのです。私が今考えますと、大正五年頃私が就職した時は、先生は「古い型がまだそこに残っている。それを勇敢にしりぞけるということもできない。だからといってこのままでは困る。できるだけ戸外保育ではフレーベルが山で子どもたちと遊んだような本当の保育状態にもどしたい」というような気持ちであったように感じられるのです。

当時の附属幼稚園主事安井先生は、(のちに倉橋先生に自分の椅子をおゆずりになり東京女子大学の学監となられた)幼稚園の教育についても研究してました。私が勤めました時には主事はこの安井先生だったのです。その頃の様子を倉橋先生の「子供讃歌」からみますと安井先生は附属幼稚園教育の種々の点を考えておられて自分の気持ちを充分にもちながら徐々に今の幼稚園を本当の姿に改善しようというようなことを相当、いろいろな点で倉橋先生とお話合いしていらしたようです。

私が勤めた時には全然古い恩物というようなものは使っておりませんでした。しかしまだ積木は積木として恩物をくずした積木で果物かごのようなザルに入れて、立方体も長方体も沢山ありました。又床の上で積む積木(床上積木)も安井先生の時にお作りになったようです。現在使用しております床上積木は机の上の小さな積木を大きくしたようなもので、なんでもないようですけれど恩物の積木からそのような積木に移るということは、大変な勇気と確信をもってしなければできないことなのです。また当時ある新聞社で婦人子供博覧会が開催されまして幼稚園からの出品として、安井先生がお考えになって床上積木で犬小屋をこしらえ、そこにぬいぐるみの犬を入れてそれを子供のひとつの遊びということで出品したのです。こういうものを博覧会に出すということが最も新しい形であるとして出品したわけでしょう。このぬいぐるみの犬を選ぶにも大変な苦労がありまして銀座を歩きまわり、ようやく犬をみつけたような状

態でした。このように安井先生も倉橋先生の助言で幼稚園を新しいものに移そうと努力なさった時期だったのです。

大正六年十一月倉橋先生は女高師の教授、幼稚園の主事におなりになりました。そこで今までもっていたあいまいなものをはっきりしなければならない時期になったわけです。先生は「なんだか今やっている幼稚園のやり方は変だ。とにかく朝の会集だけはやめましょうね」と言われました。これは先生としては大英断なのです。先生はこのようにはっきりおっしゃることはなかなかなさらなかったのです。これを一番喜んだのは私なのです。というのは私は新参で何も幼稚園のことはできなかったので、幼稚園に就職して一番苦痛であったことは朝の会集に司会者になったりピアノを弾いたりすることです。これ等を会集解消により、やらなくてもよいということで就職後一番うれしかったことなのです。その後先生は「会集は私の発意によりやめますけれども、なにか今の幼稚園はフレーベルの精神を忘れた、子どもを指導するのに適当なやり方ではない。だけど皆さんは実際家だから私は何も指示しませんから何でも自分で考えてやってみたいと思うことはどんどんやって下さいませんか。」とおっしゃいました。その時、五才児を受けもっておられた先生が大変保育技術の巧みな方でして倉橋先生の保育精神をよく理解し、又大変まめな方でいろいろなことを自分で積極的にしようという意欲の盛んな方でした。その先生は遊戯室に大きな動物園をお作りになったのです。それは床上積木が作った犬小屋の類ではないのです。以前の附属幼稚園の大きな遊戯室の壁面いっぱいになるような象をラシャ紙をいくつもつないだ大きさで作り、片方には大きなライオンを作るというように、一足飛びに小さな机の上の折紙などの細かい仕事から倉橋先生の暗示により大きい、子どもたちの製作活動に移ったのです。私は真中に子どもの腰掛ける長椅子でまわりを囲み、それを水族館にしました。その水族館の中にいっぱい鳥の剝製(おし鳥、かも等)を置き、形を作ったわけです。これは現在考えますとあたりまえの何でもないことなのですが、大正六、七年のものとしては大変飛躍的なヤリ方でした。(そのときの記録が「婦人と子ども」大正七年第十八巻三号に掲載してあるが、参考として本誌に再録してある。)

当時学習院の幼稚園は今の四谷にありましたが、この大々的な動物園を見せてあげようということで御案内したところ、受持ちの宇佐美先生が年長の子どもをつれて、わざわざ見学にみえました。

今でも動物園遊びはやっていますがその中味は随分時代と共に材料その他の点、先生の保育技術のすばらしい進歩で内容は多少変ってはいるでしょうが、繊細な子どもの活動から、大まかな製作活動というものに飛躍したということを思い出します。それから今で申しますと自由選択、自由遊びの一つでしょうが、これまでは設定された保育の状態であったのを、廊下に机を出して、部屋の中にあるいろいろな材料や用具など(クレヨン・帳面・ハサミ・色紙等)を外の机の上に並べ、自由選択という形で部屋に入る前に子どもがこの部屋に入って何をするかということを一人で考えて、積木をしようと

思う者は積木をとって入り、絵を書こうとするものは、クレヨンと画用紙をもって入る。製作をしようと思えば色紙やハサミを持って入るというように子どもの自由な活動を認めるようなことがなされました。私は年少組の子どもと上野動物園に遠足に行き、その後、部屋でごく小規模ではありましたが年長組の大じかけの動物園の真似ごとのようなことをしました。そのような時にも、教師のめいめいがみてきた動物園を、どこに何があったというようなことも頭の中に入れながら作るのです。しかし材料がごく貧弱なものであったため出来上がった物も本当に貧弱で、ただ上野の動物園の一部を小さな仕事から実際の生活の中へ入れていったという形でした。このような新しい事をするということについて先生は「どんな小さな事でも、またどんな簡易なことでも自分でしようと思ったのだからさせて、その意気を認めてやるのだ」という気持ちで、ちょうど幼稚園の子どもに対する態度と同じような意志表示をなさったので私共教師達も喜んで、新しい保育の一役をかったような気持ちでおります。

先生御自身はどのようなことをしていらっしゃるかといえば（先生は私共には外での気持ち・ゆき方を室内に持っていくようにすすめてらしたのですが）ある日お天気の良い日に「幼稚園中みんなで本校の方へ遊びにいきましょうよ。私が先頭にたっていきますからみんなあとからついていらっしゃい。」とおっしゃるのです。小走りにみんなで運動場にいきますと先生が先頭にたってぐるぐるまわり、やがて「みなさんお止まりなさい。お日様今日は」と大きな声でおっしゃるのです。そのあと「さあ、みなさんお日様にごあいさつしたからこれで帰りましょう。」といって並んで帰ってきたのです。何んだ――と子供も教師もおもいました。これが「育ての心」の「太陽に親しむ」という気持ちの一つであったのでないかと思われます。あとで考えますと出来るだけ都会の子どもは太陽に接してその恩恵をしみじみ味あわせるというような説明もおっしゃったのではないかと思います。又庭では出来るだけ砂場の中に一緒にしゃがみ、ごちそうをもらったり上手に子どもの相手をなさるのです。

それでも先生はどこまでも理論家ですから(実際家ではないので)意気揚々と子どもの中に、庭などにはいっていらっしゃいますが、子どもは本当に自分の相手として先生を扱うのですから、先生の頭の毛をくしゃくしゃにされたり、お洋服にだきつかれるのです。一方先生はなかなかのおしゃれでしたので子どもにくしゃくしゃにされると「うあー大変だ、大変だ。助けて下さい。」といって職員室に走りこまれるのです。そこがやはり実際はなかなかむずかしいことなのだと思います。又附属幼稚園には大きな藤棚があり春は紫の美しい花が咲き、秋になると葉柄が落ちるのです。これで子どもたちはよく遊びました。そして藤の葉柄で、亀の甲を作ったり、げじげじを作ったりするのが教師たちも子どもたちも大きな楽しみのひとつだったのです。時々倉橋先生も庭に出てお遊びになりますから倉橋先生も普通の先生と思い「おじちゃん」といってご自分も仲間に入り、「おじちゃん」といってついてくる子どももありました。

先生によくついて来たのは女の子でした。ある時藤の葉柄をひとかたまり握って二人の女児が先生のお部屋に入ってきたのです。そして「倉橋先生、これでげじげじこしらえてちょうだい」と言うと、先生は困って（先生は手つきは器用そうなのですけれど割合に無器用なのです）しばらく考えて「先生、できないんですよ」と言われました。すると「だって倉橋先生も先生じゃないの」と女児が言ったのです。それで先生はまいって「自分も子どもにとっては先生なのだ。だけど子どもの求める物を満たしてやれない先生とはまことにすまない。」と思い「先生できないの。ごめんなさいね。」と断り子どもを主事室の入口まで送ってあげたのです。このように先生は実際の中に入ろうという気持ちはありましたが元来学者であり理論家でいらしたので、なかなかそこまでおはいりにはなれないのでしょう。けれどもそれを卒直に断わって「これはいたらない幼稚園の先生」というお気持ちをおもちのようでした。保育室の中にはまだフレーベルの臭いが残っているが戸外では充分に、本当のフレーベル精神の遊びが続けられているということで先生は室内でも戸外と同じような、フレーベルが本当の子どもの友だちとして遊んだ、状態にもっていこうといつも考えていらしたようです。

たまたま大正七年にひどい流感がはやり、幼稚園も閉鎖しなければならないようになり、この頃せっかくもりあがってきた新幼稚園の雰囲気が、足ぶみをしたような状態になったのです。大正八年から十一年まで、先生は文部省の留学生として海外にいらっしゃいました。そして十一年の四月から本格的な先生の理論にあったような保育が始められました。しかし大正十二年の関東大震災で、園舎がなくなり大塚の地での仮住まいとなりました。幼稚園真諦に書いていらっしゃる誘導保育という新しい本当の意味の「生活さながらの教育」になるにはやはり環境がよくないとなかなかうまくゆかないということで震災により園舎が失われたことが誘導保育という生活そのものをそのままいかした保育がしばらく思うようにできないじたいになりました。そして大正十三年三月末にバラックに移り、それから本格的の誘導保育がなされたのです。そのような事から誘導保育の本当の先生の生活主義（生活を生活で生活へ）の保育精神がやっとバラックの園舎から本格的に発足したのです。そして昭和八年に現在の附属幼稚園の園舎に移り、この新園舎でさまざまな誘導保育の実際が展開されました。先生は同時にその状態を昭和九年に「幼稚園真諦」としてご出版になりました。これは昭和八年初めてこの大きな講堂で当時の全国の幼稚園の先生方にこの新しい本当の意味の保育、即ちフレーベルの思想をくんだ、ご自分の考えを入れた、保育精神にのっとった、実際の保育の計画および方法つまり「生活主義」の形の保育の本当の道を講義なさったのです。その講義を整理して「幼稚園真諦」をお出しになったわけなのです。その後昭和十一年「育ての心」を出版なされました。さきほど話したげじげじのことだとか、お日様今日はなどそのばそのばの育てる気持ち（先生）を随時書いていらっしゃいます。

私共幼稚園教育について戦後アメリカの指導を受けました。これによっていかにも新しい幼稚園を作っていくかのような感じをもったものもあるようですが、結局それは長年自分（倉橋先生）がもっている幼稚園の教育の思想そのままである。また実践そのままである。自分が何十年来こういうことを主義主張としてもっているけれども、「あれは倉橋先生の自由主義教育の保育である」とか「あれは実際には、できない保育である」とかいうような批判めいたことをきいた。しかしいまアメリカの人たちの指導の保育と精神は同じで、実践もまた同様である。自分が口をすっぱくして主張した新保育がようやく受け入れられたのかという感じが強かった。

今アメリカの指導により、「このような新保育を批判なしに受けている」ということについて、「今さらながらみんながそれがわかったのか」というようなことを、私たちに倉橋先生は一人ごとのようにいっておられたことを思い出されます。

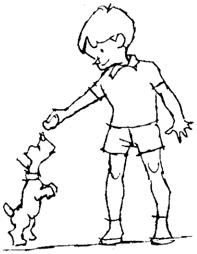
このように今の幼稚園教育の根幹は、どうしても倉橋先生のペスタロッチ・フレーベルの子どもの真の状態をよく理解し、その上児童心理学といった科学的な基礎の上にたって子どもの指導の原理を理解し、あわせて実際の指導の面にも細かい心ずかいを示したこの著書によって教えられることが多いのでございます。

私が倉橋先生のことをお話するにあたりましても四十年来側近におりまして沢山教えていただきましたかずかずのことごとそのものが今度、先生の著書を読み返しますことにより改めて感じ深くしたのであります。私にとりましてはこの講習は、改めて倉橋先生を勉強する良い機会を与えていただいたと思います。皆様方も今後いろいろな保育の理論的な研究に、また実際的な研究の面に、ひとつこの倉橋先生の著書をお読みになりますと、その中からあい通ずるものがあるのではないかとおもわれます。この記念出版の書物に目をとおしていただければ結構だと存じます。さらに先生はどこまでも、子どもが自然にもっているものを育てるのだ、ということが、大人（教師や親）のしなければならないことで、大人のもっているものを、子どもの方へ好むと好まざるとにかかわらずあてがうのではないというこの精神を、倉橋先生は私共教師の指導の精神とも、していらっしゃったように思います。そのため、先生から指示を受けたことが少なく、計画し考えたこと、実践したことが倉橋先生に批判される時に、果してそれが先生の保育理論にマッチしていたのか、保育方法にマッチしているのか全然わからないのです。私たちのしたことが先生に満足していただけるかどうかは全然わからないのです。「良い」とも「悪い」ともおっしゃらず、先生の保育精神と私たちのしたことが一致した時には「偶然の一致」と私共教師は考えておりました。このように「みずから育つものを育てる」という精神を私達教師に対しても持っていて下さったことは少しでも自発的、創意工夫をする精神を育てていただいたと先生に感謝しているしだいです。なお先生の著書をおよみいただくことにより演題の内容をおくみとり下されば幸に存じます。

倉橋惣三と誘導保育論

——倉橋惣三の幼児教育論の紹介——

津守真



今年は、倉橋惣三の没後十年にあたる。倉橋惣三といっても、今では、幼児教育を専門とする人でも知る人が少なくなったことは、私には、たいへん不思議なことに感ぜられる。それは、倉橋惣三の幼児教育論は、現在の幼児教育の基礎をつくったものであり、現在においても、なお新しく、傾聴すべきものをもっているからである。最近、絶版になっていて入手することができなくなっていた旧著が、この機会に選集として再刊されることになったが、これは、わが国の幼児教育の進展にとって、意義深いものであると思う。

大正や昭和のはじめに書かれたものが、四十年後にもなお読む価値があるということは、変動のはげしい現代において、これもまた不思議といわねばならないのかもしれない。

しかし、四十年前に問題とされたことが、四十年後の今日でも、いまだにすっかり解決されず、同じ問題がくりかえし提出されているのが、幼児教育界の現状である。また、四十年前に、彼が提出した幼児教育論は、当時にあっても新しかったものであるが、いまだに結実されずに現代にもちこされているともいえよう。

ちょうど十年前、雑誌「幼児の教育」の昭和三十年の一月号の巻頭論文に、倉橋先生にぜひ書いて頂きたいとお願いしたことがあった。そのときに、先生は「新しき年を迎えるにあたって」と題して、旧著の中から一文をこのまま倉橋用紙に写して書いてくださった。その文章は、次のような書き出しではじまっている。

根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところで動いている。かなりいろいろのことが考えられ、試みられ、部分的に究明されるにもかかわらず、意極の決定はいつまでも残されている。——わが国の幼稚園教育界は、こんなふうにして

一年一年過ぎているのではあるまいか。時の経過はなにほどかずつの進歩を積み上げていくには相違ない。しかしこの進歩は、あまりに気まぐれる。無秩序な、断片的な集積にすぎないものであって、そこに何等の系統的組織的進歩というものを見ない。思えばあまりに非学問的なことである。

旧著の引用のあと、次のように結ばれている。

私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変わっていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。

倉橋惣三がおろした地盤の上に、着実に積み重ねられたのが現在であったなら、どんなにかよいであろう。

倉橋惣三の幼児教育論の中心は、誘導保育論であり、これは、現代の教育史における第二の教育改革ともいえる今世紀初頭の新教育論に根ざすものである。それにかえて、彼の幼児に対する態度には、独自の直観的洞察がある。

いま、この機会に彼の誘導保育論を中心にして、倉橋惣三の幼児教育論を紹介しその現代的意義について記してみようと思う。

一、誘導保育論の成立

倉橋惣三が現代にのこした大きな功績は、当時のフレーベル主義の伝統をひいた形式的秩序を重んずる保育形態から幼稚園を解放して、幼児の発達にふさわしい生活を、幼稚園の中で実現しようとしたことであろう。彼が東京女高師の附属幼稚園の主事となった年、大正六年に、フレーベルの恩物の積木を、四角い箱の中から出して、ただの遊具として籠の中にいれ、同時にそれまで行なわれていたいわゆる会集「朝の集り」を廃止した。これは、日本の幼稚園の歴史にとって、ひじょうに大きなできごととして記憶されてよいことである。この間の事情を、彼は、その自伝的な著作「子供讃歌」の中で、当時の『新保育』と題して、次のように述べている。

「若い彼は当時の保育界の現状にあきたらなかった。それは彼の研究の結果か、若さのせいかわからないが、とにかく、不満の点が理論にも実際にも多かった。ただし彼自身の考え方として、教育にそうそう新が得られるわけではない。千古永劫の真こそとうといのであることは知っていた。それで、世間の新しがり屋(ニューマニヤ)のように、何もことごとく新保育の名で、高慢な顔をしようなどとは思いもよらないことであった。ただ一途に真保育を求めたのである。彼がフレーベリアン・オルソドックス派に盾ついたのも、論理主義や伝統主義のために幼児教育の真が覆われるのを怖れたからに他ならなかった。そういう心持ちのなかで、彼は東京女高師附属幼稚園の主事を命ぜられた（大正六年）……新まいの園丁に大した花壇の設計な

んかできようもないが、一応気をかえるためにしたことは、創園以来の古いフレーベル二十恩物箱を棚から取り降して、第一、第二その他系列をまぜこぜにして竹かごの中へ入れたことであった。（子供讃歌、倉橋選集、一九八―一九九頁）

倉橋惣三が、このような新しい保育にふみきったのは、彼も述べているように、けっして、彼の独創ではない。欧米においても、ペスタロッチ、フレーベルなどによって、ひとたびなされた教育改革が、年月とともにまた形式主義におちいり、その批判として、いわゆる進歩主義教育、新教育が主張されてきたのが、一九〇〇年代の初頭、すなわち、明治の末から大正のはじめであった。児童心理学の草わけと言われるスタンレー・ホール、新教育理論の巨頭、ジョン・デューイーらが理論的基礎をきづき、パティ・ヒルは、シカゴ大学の附属幼稚園でそれを実際に移していた。

わが国においても、早くより、欧米の新教育思想は紹介され、「幼児の教育」の前身である「婦人と子ども」の創刊号、明治三十四年（一九〇〇年）より、その編集者、東基告によって、フレーベル主義の批判ならびに、新教育について記されている。また、明治三十七年発行の、東基告「幼稚園保育法」、明治三十九年発行の、中村五六「保育法」の中にも、フレーベルの批判が散見される。フレーベル批判ならびに新教育の提唱は、けっして倉橋にはじまったものでなく、その気運はわが国においても、次第に醸成されていたのである。ちょうど、そのような時に、倉橋は女高師附属幼稚園の主事として、名実ともに、新教育の実践という役割を荷ったものである。

倉橋惣三自身の新教育思想も、かなり早くより、見ることができる。「婦人と子ども」誌上には、明治四十三年ころより、ほとんど毎号にわたって何らかの記事をみることができる。明治四十三年九月「幼児の遊戯について」同十一月、「感化誘導」などは、発達心理学にもとづいた教育論である。欧米の新教育思想の紹介も多数見られる。たとえば、明治四十四年一月には、「机辺だより」として、「クラーク大学の児童研究事業」が紹介され、「パルマー氏の保育法の基礎としての発達の段階」が紹介されている。クラーク大学は、スタンレー・ホールの児童研究の根城であり、パルマー氏は、新教育の指導者である。また、同年八月〜十月には、スタンレー・ホールによる、有名なフレーベル主義幼稚園批判の書、「幼稚園の改良」という論文が紹介されている。このようにして、欧米の新教育思想を学びながら、倉橋は、また独自の眼をもって、日本の保育界をみ、そこで必要とするものをさし示していった。

明治四十三年に、彼は、京阪神三市連合保育会の総会で「保育の新しい目標」と題して講演を行なった。これは、著書「幼稚園雑草」（倉橋選集、第二巻に収録）の中に収められているが、その論文の

終りに、著者は次のような注釈を後に加えている。

『(これは四十年近い以前に神戸において試みた講演である。幼稚園教育に関する私の最初の講演であるが、今も尚この考えを捨てない。のみならず、今日も、まだ、同じ注意を必要とするところの多くあるのは、わが国幼児教育のために遺憾である。著者)』

これほどに彼が強調している幼児教育の新目標は何か、それは、神経の健全、強健な子どもをつくることであるといっている。すなわち、「困難に打ち克って疲れず、所信と使命とを実行して行き得る」人間を現代は要求しているという。そのために幼稚園は何をすればよいかといえば、第一には、自然に子どもをふれさせ、戸外保育を無視せねばならない。第二には、子どもを机から解放し、小さな手仕事から、大筋肉を使う方向へとかえてゆかなければならないと言う。幼稚園生活のスケールを大きくして、神経質に生活をこまぎれにすることをやめたらよいという主張である。

この時の講演のようすが、「子供讃歌」の中にこまかく描写されている。

『神戸―望月くに女史』

武庫山を背にした斜面の港町の八月は、明るい日光と海からの涼風にめぐまれて、さわやかである。神戸幼稚園の広い部屋の硝子窓が、いっぱいにあけはなたれて、中央の大テーブルには、籠に盛られた新鮮ないろいろの果物とサイダーの泡のたつ幾つかのコップが置かれてあり、白いテーブルクロースを、窓からの風が、ひらひらとさせている。」という書き出しからはじまって、次のように記してある。

「翌年の春、彼は、三市連合会の総会で、『保育の新しい目標』と題して、長い講演をした。東京では、遠慮してひかえていた彼の新保育論、ことに、フレーベリアン・オルソドキシーに対する批判的な論を、望月さんの求められた通り、勝手に自由に、やや無遠慮なくらいに説いたのである。」(倉橋選集一八一頁―一八二頁)

こうして、彼が、大正六年、東京女高師の主事となるとともに、彼の保育論は、実際保育に実現されていった。そして、たんに、欧米の新教育論の直輸入ではなしに、彼自身の保育論は、その実践的協力者の助力を得て、大正末年から、昭和初年にかけて次第に熟し、昭和九年の「幼稚園保育法真諦」となって結実するのである。(倉橋選集・第一巻に所載)

二、誘導保育論の構造

「幼稚園真諦」の中心をなす教育論は、誘導保育論であり、現代の幼児教育の基礎をなす教育論であるともいえる。次に、「幼稚園真諦にもとづいて、倉橋惣三の誘導保育論について、その輪郭を述べる。

彼の教育論は、実践を予想することなしにはあり得ない。しかも、

その実践は、しっかりした教育の原理に立つものでなければならない。その原理と実践を結ぶところに、実際的教育論がある。原理が実現されるのは、一日の生活の中においてであり、その一日がつみ重なって数週間を形成するところに保育案ができる。

原理
案
一日
実践

1、誘導保育の原理

児童観

保育の原理は、まず、それを支える児童観から出発する。誘導保育の基礎には、まず、人間を尊重し、幼児を一人の人間として尊重する態度がなければならない。この児童観は、「幼稚園保育法真諦」の初版の第一篇保育法真諦の扉の、倉橋惣三の美しい文章に、よく示されている。

「教育はよりよく生かすことである。よりよく生かすには、自ら生きているものをまず存分に生かしておくことに始まらなければならない。これが人間の常識である。」と幼児に向う根本的態度が示される。

保育者は、まず、相手を生かす努力にはじまり、しかも、自らは、他人を生かすために表立たないようにかげにかくれる。「自らをあらわにしないで、そっと他を生かす。これ人間最大の愉快である。」という。幼児教育にたずさわる者の根本的態度として学ぶべきである。

倉橋惣三

教育はよりよく生かすことである。よりよく生かすには、自ら生きているものをまず存分に生かしておくことに始まらなければならない。これが人間の常識である。

相手の生活を認めゆるして、それを尊重することは、生きているものに対する義務であり、礼儀である。況んや相手は幼きものである。敢て犯さざらんことに細心の用意がなくてはならない。これが人間の作法である。

生きているものが、われあるによって一層生きてくれる。しかも、われは常に相手の生活の下に潜み内にかくれて、その意図と努力とを表立てない。自らをあらわにしないで、そっと他を生かす。これ人間最大の愉快である。

幼稚園保育法真諦、初版第一篇の扉より

目標論

幼児の中に実現したい教育目標はいろいろあるが、それは、幼児の中に実現できるものでなければ意味がない。そこで、むしろ、教育目的に子どもをひっぱっていくよりも、対象に即して、目標を実現することの方が重要であり、対象本位に考える必要がある。

方法論

それでは、相手を尊重しながら、対象に即して教育目標を実現していくのにはどうしたらよいか、そこに保育方法論が生れる。これが誘導保育論である。

「幼稚園真諦」の第一篇の終りに、次のような図式で、方法論の梗概が示されている。（倉橋選集第一巻、五七頁）

> 幼児のさながらの生活――{自由／設備}――自己充実――充実指導――
> 誘導――誘導――教導

まず、幼児のありのままの生活を生かすことからはじまる。教育は、幼児の生活に近づいていかなければならない。そして、その幼児の生活が十分に満足するものとなるように、充実したものにしていく。現代のことばを用いるならば、幼児の自発性を生かし、ニードをみたしていくことを考える。それには、自己の活動ができるための自由（時間）が必要である。

この上に指導が考えられるのであるが、それは、上から子どもをひっぱっていく指導ではなくて、充実指導である。すなわち、充実したいのは自己充実できないでいるところを指導してやることである。それはどのようにしてなされるかといえば、保育者が子どもの中にはいっていってはじめてできることである。

誘　導

充実指導は、その場に応じた指導であるが、さらに、子どもの断片的な活動に中心を与えて系統づけてやるところに、誘導が生れる。すなわち、子どもの興味に即して主題を与えてやることによって、現代のことばを用いるならば、いっそうよく動機づけられる。いわゆる単元あそびともいえるような、「お店や」「汽車ごっこ」「動物園」などのはじまりが、ここにみられる。

最後に「教導」がくるが、これは最後にあって、ほんのわずかだけ付け加えられるにすぎない。ちょっと知識を与えるなどである。

2、保育案

保育案の考え方については、これも、「幼稚園保育法真諦の初版の第二篇の扉に記されている文章によくあらわれている。用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。」と保育案、教育計画に対する根本的態度が示される。

倉橋惣三

> 用意なしに客を迎えてはならぬ。しかも、客を迎えてその用意を強いてはならぬ。
>
> 用意は細心でなければならぬ。しかし、細心は当方の心がけであって、それを客にふすべきものではない。その心入れがどこにあるのか気づかれないまでに細心でなければなるまい。
>
> どこに用意があるのかも心づかせず、全く自分達の心からのように、その用意を受けさせてこそ、客をもてなすというものである。もてなしの上手とはいうべきものである。その上手な趣向に誘われて、客は時の移るのも、もてなされていることも忘れてくれる。客の幸福これに如くはない。主人の喜びもまたこれに過ぐるはない。
>
> これ、すべて、人が人に対する常道である。教育もまた同じ。
>
> 幼稚園保育法真諦、初版第二篇の扉より

子どもの自発的にみえる活動のうらには、保育者の側に客をもてなす用意がある。

誘導保育案においては、幼児の自然な生活が尊重され、それが発展、展開される。保育者の側には多くの準備が必要だが、実際に展開される場においては、保育者の準備は後にかくれ、子どもの意図が正面に出てくる。その場をいかに展開させるかに当っては、保育者の創造性が必須条件となる。

また、ここで注目すべきことは、保育案と保育内容、（ねらい、または、保育項目）との関係である。

「まず保育項目があって、保育案を作るのではなく、まず誘導保育案をたてて、それから各々の保育内容事項が考えられるのです。」（倉橋選集、七七頁）と「幼稚園真諦」の中に明記されているように、こまかいねらいをくみ立てて指導計画ができうるのではなくて、逆に、生活の主題があって、この中で多くの価値あるねらいが実現されるようにすることの重要性が述べられているのである。この点は、今日でも、あやまりを犯すことがいかに多いことであろうか。

3、一日の流れ

実際保育に当っては、一日一日がたいせつである。どんなにりっぱな計画があり、原理があっても、この日一日が子どもにとって満足のゆかないものであったら、それはよい保育とはいえない。

一日の流れについても、著者は、初篇の第三篇の扉に次のように

述べてある。

「つぎめ無きを貴ぶのは練絹だけではない。われめ無きを賞づるのは、青玉に限らない。」と著者はいう。

朝、幼稚園にきてから、帰るまで、幼稚園の生活は、流れるように、自然に進んでゆくのでなければならない。自由遊びから仕事へ、仕事から自由遊びへと、その境界はなくてよいはずである。幼児にとっては、遊びと仕事の区別はない。また、個―分団―組と、子どもの活動は、あるときは個人で、あるときは小さなグループで、あるときは組全体で、その時に応じて人数も変化する。

幼稚園の朝は、とくに重要であり、折にふれて強調されるが、幼稚園雑草の中には、とくに、「幼稚園の朝」として、次のように述べられている。

「幼稚園の朝は大切な時間である。子どもの新鮮な心持ちを如何に迎えるかは、大きな注意を要する問題である。昔の幼稚園では会集ということをした。会集そのものの問題は別の話として、とにかく、それを教育開始としたものである。会集前は幼稚園のまだ始まってない時間とした。会集はしないでもさあこれからとくぎりをつけて教育開始をする風がどこにもある。そのくぎりを鐘でするのもある。「みなさんおはいり」でするのもある。いずれにしても、このくぎりがある以上、その前は軽く扱われる。子どもは来ていても、先生はいても、まだ幼稚園は始まっていないことに考えられたりする。それでいいものであろうか。」（幼稚園雑草・倉橋選集第二巻）

倉橋惣三

つぎめ無きを貴ぶのは、練絹だけではない。われめ無きを賞づるのは、青玉に限らない。何ものにも渾然として完きを美とするからである。断片と破片と、いくらこのひときれひときれが美しそうでも、ついに完きを味い難い。まして、何を苦しんで、求めて、完きものを裁ち、裂き、こぼつことをしよう。

生命を貴び、自然を愛するものは、故意と作為とを嫌い、一切のわざとらしさを忌む。そこには、他の何ものを得ても、真を失うからである。まして、何のために、強いて、生命を傷つけ、自然を害うことを企てよう。

美と真を軽んじて、なんの正しい教育工夫があろう。

幼稚園保育法真諦、初版第三篇の扉より

教育というものが、きわめてダイナミックにとらえられている。これを実践するだけでも、幼稚園・保育園の教育はまるで違ったものになるであろう。

4、実　践

よいと思った教育の原理でも、これを実践にうつすのには、実行力が必要であり、よいと思う方向に一歩をふみ出す勇気が必要である。「幼稚園保育法真諦」の第四篇には、誘導保育の実践例があげられているが、その前に、次のようなことばが記してある。

「教育は、考えてばかりいては解らぬところがある……試みるには少しばかり勇気がいる。少くも無精者であってはならぬ。工夫がいる。独創がいる。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。」

その勇気をもってなされた最初の誘導保育の実例が、「婦人と子ども」大正七年に、「動物園あそびの記」として掲載されており、第二の記事が、大正十四月の「八百屋遊び」として、「幼児の教育」にみられる。（本誌に、再掲載してあるので参照されたい。）現在、どこの幼稚園にも見られる、「動物園」や「お店や」の最初の試みとして、見るべきものがある。

三、外国の幼児教育の動向との関係

すでに前に述べたように、倉橋惣三の誘導保育論は、倉橋惣三の

倉　橋　惣　三

教育は、考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや、論じ合ってばかりいては、ますますことむずかしくなるのみである。試みて見るにかぎる。そこには、あんがいに多くの可能を見出される。おのずからなる会得にも到るというものである。

試みるには少しばかり勇気がいる。少くも無精者であってはならぬ。工夫がいる。独創がいる。しかし、それが故にこそ、真の楽しさもまた伴うというものである。

一定の型と、くりかえされる手順と、それによってラクラクと保育すること、保育されること、これほど幼稚園に真の楽しさを失わせるものはない。子どもに、然り、いっそう、先生に。

幼稚園保育法真諦、第四篇の扉より

独創によるものではない。すでに、米国において発した新教育、進歩主義教育の主張と同じである。その実際のモデルも、米国の新しい幼稚園に見ることのできたものである。一九一九年（大正八年）には、万国幼稚園連盟が、標準カリキュラムを作成し、新教育理論の実践に役立てようとしているが、その内容は、ほとんど誘導保育論の論旨と同じである。そこでは、主題が選択され、幼児の興味と活動が重視されている。このカリキュラムが、現代の新しい幼児教育のカリキュラムの最初のものであり、また、基礎をなしているものと考えてよい。

（International Kindergarten Union. The Kindergarten Curriculum. U. S. Bureau of Education Bulletin. 1919. No 16. 1—74）

倉橋惣三自身、このカリキュラムの翻訳を試み、大正十二年〜十三年の「幼児の教育」に、「万国幼稚園協会幼稚園要目」として連載している。

その後、新教育論にもとずいた。実際保育のための手引書や実践例は、一九二〇年代、一九三〇年代に、欧米において続出しており、その実際の保育の展開例は、その理論的構成など、倉橋惣三の誘導保育論とほとんどかわらないのである。

このように、倉橋惣三の誘導保育論は、世界の教育史の趨勢の中で、けっして、特別に変わったものでもなく、むしろ、当然あらわれるべくしてあらわれたものということができる。それは、新教育理論の実践的展開にほかならないのである。

しかしながら、直輸入を嫌った倉橋惣三は、これを輸入品として紹介することにとどまらなかった。むしろ、ペスタロッチ、フレーベルの教育改革の精神、また、進歩主義教育の教育改革の精神を、すっかり消化した上で、日本の幼児教育界に適合した形で、彼のいう「真」教育を実現しようとしたのである。ここに、倉橋惣三の新教育論の日本的性格があらわれてくる。それは、教育者精神ともいうべきもので、教育的な洞察を数多くふくんでいる。実は、倉橋惣三の論は、この教育的洞察の故に、多くの人が魅せられるのであろう。ここには、倉橋惣三の独自性がある。

四、日本的性格
——教育者、保育者の子どもに接する態度について——

きわめて早い時期から、倉橋惣三の文章には、保育者、教師としての態度について、教えられるものが多い。

「幼育園雑草」、「育ての心」の二著は、彼の教育観を示す文章が多い。幼稚園雑草には、大正十五年以前のものが収められ、育ての心には、昭和十一年以前のものが収められている。その後のものも、雑誌に発表されたものは数多いが、書物としてはまとめられていない。

すでに数多くの文章を引いたのであるが、倉橋惣三の保育論の日

本的性格にふれるのには、どうしても、彼の文章そのままを見なければならないので、もう少し、例を引くことを許して頂きたいと思う。

「幼稚園雑草」の中でも、もっとも初期に書かれたものに、明治四十四年十一月の「婦人と子ども」に掲載された。「きげんのよしあし」というのがある。教育者自身が子どもの前に立つ時の心構えを述べたものであるが、こんなに早い時期に書かれたものであることに驚くのである。

きげんのよしあし

毎日のことである。きげんのよしあしは免れない。あるいは体の具合にも変りがある。天気の加減もある。昨日一昨日の疲労のぬけぬこともある。家のこと、友のこと、身のことにつけて、何かと屈托も折々はある。始終ににこにこ上きげんでいるということは我々凡人にはなかなかむずかしい。きげんの悪い時はことごとものうく、おっくうになる。常にはさほどにも思わぬことが、うるさくもなればいろいろ気にも障る。まして心に心配ごとでもあるという時には、人の心配も知らないでと、ついぢれったい気にもなる。誰れであったか読み人は忘れたが、こういう歌をどこかで見たことがある。

我が胸のけふ憂ひも知らずして　袖にまつはる子供達かな

お母様にさえ時にはこういう感じがあるという。姉さんにもあるという。二十人三十人と多勢の幼児をあずかる若い身には、あとで済まないと思いながらも、つい起り易い感じである。保母諸君とて幼稚園のみに生きている人ではない。親もあり弟妹もあり恋もあろう身の、小さい胸につつみきれぬ物案じは誰れにもあることである。……中略

しかし、これはまだ修養の途中である。もう一段の修食を積んだ人には、このいろいろの切なさが無くなるのであるらしい。その場その場に心の闘をして努めて己れに克つ要もなく、それが心の自然になるものらしい。心の内にはどのような苦労があっても、足ひとたび幼稚園の門に入り、耳に幼児の声を聞けば、そのまま活き活きと心をおこすものらしい。そしていかなる時といえども、不断の愉色を顔に湛えていられるものであるらしい。この聖に近い常性を得たいのは、切々と心を練る我らの修養の目あてである。今日ただその途中、せめて我ままからの不きげんとつつしみたい。せっかく可愛い子どもの傍にいて、心で子供を拒けるようのことを警みたい。

（幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻）

子どもの前に出たら、教師は自分の感情を抑えて、子どもを受容するようにということを述べたものであるが、それだけいわれて

も、それは本当のことではあるが、私どもは、そうすることができない。ここにいわれているように、まず、教師の心の中にあるさまざまな感情や悩みがまず受容されて、はじめて客観的にみることができるようになる。現代のカウンセリングの理論がこのままここに表現されているのを見る。

ひとたび幼児の前に立ったときには、教師、保育者は、幼児の中にある可能性を見ることができなければならない。それによって教育的機能がはじまる。次に掲げるのは、大正七年二月に「婦人と子ども」に掲載されたもので、主事になった倉橋惣三の感想集の第2である。

人間の偉大さを

○

人間の偉大さを知るもののみが、人間を教育することの偉大さを知り得る。

○

人間に関する浅薄卑俗たる解釈、人間に関する無知と無感激。これほど教育上有害なるものはない。凡庸主義は、いつでも麻痺剤である。教育においてはことにそうである。世にこれほど有害なるものはない。……中略……

○

この子が日蓮になるかも知れない。この子がベートーベンになるかも知れない。私は驚き後ずさりしてその子供を見る。……

私は心理学によって子供を知り、教育学によって子供の教育法を学ぶ他に、たえず人間の偉大さを知らなければならない。たえず心にその感激を湛えていなければならない。そうでない時、私の目は子供において凡庸だけを見るものとなるであろう。

（幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻）

幼児の中に、どのように伸びてゆくか予測できない可能性を認めたとき、私どもは新鮮な眼で子どもをみるようになる。

さらに教師、保育者は、子どもを見る眼を養うことがたいせつである。そして、子どもの心の動きや、ニードに対して敏感になることが、よい教師、よい保育者となる条件である。それには、あたりまえとみえる子どもの一挙一動に驚きの眼をむけ新しい意味を見出せるようになるとき、なし得られるであろう。次に掲げるものは、「育ての心」に載っているものであるが、昭和6年4月の「幼児の教育」に掲載されたものである。

驚く心

おや、こんなところに芽がふいている。
畠には、小さい豆の嫩葉が、えらい勢で土の塊を持ち上げている。
籔には、固い地面をひび割らせて、ぐんぐんと筍が突き出して来る。
伸びてゆく蔓の、なんという迅さだ。
竹になる勢の、なんという、すさまじさだ。

おや、この子に、こんな力が。……
えっ、あの子に、そんな力が。……
驚く人であることにおいて、教育者は詩人と同じだ。
驚く心が失せた時、詩も教育も、形だけが美しい殻になる。

(育ての心、倉橋選集、第三巻)

倉橋惣三は、しばしば、自由保育論者であるといわれる。たしかに、彼は、子どもの自由な活動を重んじた。しかし、彼自身は、自由保育といおうと何といおうと、真の保育をを求めるのだというであろう。ことに、現代解釈されている「自由保育」は、あまりに安易にすぎることが多い。子どもに勝手なことをさせておいて、それを見ているのが「自由」であると。しかし、それは大きな間違いであって、子どもの自由な活動の背後には、教師、保育者の細心な準備、心づかい、計画、また、人には見えない配慮があるのである 。

子どもの活動は自由であるが、おとなの側には、一点、犯すべからざるものがなければならない。

一点の厳粛味

子供は遊ぶ。われらは子供と共に遊ぶ。しかしおとなの遊びに子供を使ってはならない。
子供は自由だ。われらは子供に自由を与えてやりたい。しかし、子供にいかなる生活をさせるかにはおのずからなる限度がある。みだるべからざる規矩がある。子供は自由だが、子供の相手をするものには、守るべきところがなくてはならぬ。……中略
子供といっしょに笑いながら、ふざけながら、おどけながらも、自分自ら戒め慎みてみだるところのない一点の厳粛味、それのないものには子どもは託せられない。

(幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻)

倉橋惣三の保育論の後にある、武士道的ともいえる折り目の正しさを、見逃してはならない。
以上に述べたものは、おとなが子どもに対するときに、柔軟心をもって向わねばならぬことを説いたものであった。理論化し、あるいは論理的に述べるならば、それも可能である。しかし、それを、

倉橋惣三は、直観的洞察をもって示した。そして、それによって、人は理論的に述べることはできなくとも、直観的に体得することができるのである。このような意味で、倉橋惣三の文章は、日本の幼児教育界の与えられた大きな遺産であると思う。倉橋惣三の保育論そのものも、もちろん、現代に生きる新しいものである。しかし、それは、論理的に分解するならば、進歩的な幼児教育論に共通の論旨である。だが、倉橋惣三の幼児に対する直観的洞察を示す文章は、他に類を見ないものである。相手に対する同感、子どもの姿に驚く眼、子どもと互いに通じあう気持ち、このように、おとなが子どもと内面的に交流することができるようになるために、日本的な直観力は大いに役立つものであろう。

　日本の幼児教育は、今後、ひろく、世界の幼児教育に貢献することのできる芽ばえをたくさんもっている。その中でも、倉橋惣三の示したような子どもに対する直観的な理解——それは日本語の表現をとるので、国際的に理解されることは容易でないのであるが——は、世界に対して寄与することのできる大きなものであると思う。おとなが、子どもの気持ちをもっと理解するようになったなら、それは、世界平和にも役立つであろう。

つけたし

　私が米国留学中のことであった。七月のある日、珍らしく、倉橋先生より手紙をいただいた。故郷を遠く離れて外国にいるときに、郵便ボックスの中に手紙を見つけることは、実に嬉しいものである。すぐに開くのはもったいないから、いつも、しばらくポケットの中にいれておいて、ゆっくりと読む時間ができたときに封をきって読むのが常であった。その日も、私は、先生の手紙をポケットの中で温めて、それから、スチューデント・ユニオン（学生会館）の談話室のソファにふかぶかと腰をおろしたのである。日本の学生会館と違って、七階建ての、冷暖房完備の、機械文明の象徴であるような、デラックスな鉄筋コンクリートの建物である。そこでおもむろに、先生の手紙を開くと、二つ折りにした手紙の中から、笹の葉が一枚出てきた。そして、このわきに、「おほしさま」と書いてあった。あとは、二、三行、安否をたずねることばが記されているだけの手紙だった。私は、この笹の葉に、実に、日本的なものを感じたのであった。もう、すでに枯れて黄色くなった一枚の葉は、英語をはなす機械文明の国の人には、何の意味もない一枚の枯葉であろう。床に落したら、誰かが靴の底で踏んでしまって、それきりのものである。しかし、その一枚の枯葉に、たなばたさまの思い出や、日本の香りをいっぱいに感じたのであった。ぎっしりと並べられた文字よりも、もっと多くのものを、先生の送ってくださった一枚の笹の葉に読んだのである。黄色くなった枯葉を示しながら、拙い英語でどんなに説明しても、私の親しくしている人にすら、共感して

もらえそうもない寂しさを感ぜざるを得なかった。

倉橋先生の文章を外国人にわかってもらおうとするときに、同じもどかしさを感ずるのである。これはどうしたらよいのであろうか。

五、むすび

——子どもから学ぶ——

倉橋惣三の幼児教育論の紹介を結ぶに当って、どうしても一言しておかなければならないことがある。それは、倉橋惣三の幼児教育論は、ペスタロッチ、フレーベル、デューイー、スタンレー・ホールなど、多くの先駆者に負っているが、もっとも多く負っているのは、子ども自身であることである。それだからこそ、四十年後に読んでも、なお、幼児に接する者の共感をよぶのである。彼自身、次のように述べている。

子どもから学べよ

「子どもから学べ」ということは、フレーベルが幼児教育者に与えた最大なる格言のひとつである。のみならず、フレーベル自身がその実を体証しているのである、けだしフレーベルの彼の教育的創見は、もとより彼の大いなる天才によることであるには相違ないが、ひとつには彼がよく子供に学んだ結果であるといえる。……フレーベルの師はシュリングでもなくてペスタロッチでもなくて実に子供であるというべきである。……

フレーベルのみではない。教育上の偉大なる創見は、すべて、子供から学んだもののみである。もしそれが、子供以外のものから出た知識理論であるときには、たいてい失敗であることが多い。すなわち少しく奇に過ぎた言い方をするようではあるが、子供はまず教育者に教えて、それが自分を教育させるのであるといってよい。

(大正2年、幼稚園雑草、倉橋選集、第二巻)

子どもから学ぶことこそ、幼児教育の理論と実践の進展のための最大の条件であろう。

神の創造物である人間の、もっとも純なものである幼児に、私どもは、教えられるものをたくさんもっているのである。

倉橋惣三の幼児教育論を通して、私どもの教えられた大きなものは、子どもから学ぶことの偉大さを知らされたことであろう。今後、時代の進展とともに、施設的にも、制度的にも、学問的にも、技術的にも、幼児教育に進展していくであろうが、その際に、私どもに、基本的に「子どもから学ぶ」謙虚さを忘れてはならないのである。

倉橋文庫について

――御報告とおねがい――

倉橋惣三先生の幼児教育界に残された業績を記念して、昭和三十二年に、お茶の水女子大学の図書館内に、倉橋文庫が寄贈されました。それは、幼稚園界、各方面の方々の御協力によって寄付されましたことは、皆さま、御承知の通りであります。その後も、ひきつづき、著書などの寄贈をいただき、現在、倉橋文庫には、三二四部（全集・雑誌はひとそろいを一部とする）の書物が収められております。その中には、とくに、進藤りう氏より御寄贈いただいた「婦人と子ども」第一巻より第十八巻まで、「幼児の教育」第十九巻より第三十巻まで、および立野みえ氏より御寄贈いただいた、「幼児の教育」第二十五巻より第四十四巻がふくまれております。その他、現在では得がたい貴重な資料が数多くふくまれております。

なお、今後とも、新しく出版されました御著書、幼稚園、保育園の記念誌、沿革史など、御寄贈いただけますならば、幸いに存じます。お茶の水女子大学附属図書館内に、永く記念として保存いたしたいと存じます。

お茶の水女子大学附属幼稚園内　日本幼稚園協会

幼児教育の大先達倉橋惣三先生十年祭記念出版

倉橋惣三選集

全三巻

○保育者座右の書○

倉橋惣三の功績を一言にしていえば、わが国の幼児教育についての基礎的な理論を集大成し、その基本的な方向を指し示すとともに、現場の実践に対する熱心な指導と啓蒙をつづけたことにあるといえよう。

倉橋惣三は（中略）若い頃から幼児を愛し、幼児教育に関心をもち、ついにその一生を幼児教育の研究と実践に捧げたのであった。（中略）その影響はことのほかふかく、ひろく、わが国における「幼児教育の父」とさえいわれるにいたった。

（中略）わが国の幼児教育は現在なお、彼が敷いた路線の上を歩きつづけている。見方によれば現在ほど彼の精神が生きているときはなかったとさえいえるであろう。

――まえがきより――

編集委員　坂元彦太郎　及川ふみ　津守真

内　容

第一巻「幼稚園真諦」「子供讃歌」「フレーベル」
第二巻「幼稚園雑草」
第三巻「育ての心」「就学前の教育」

装幀・題字　東山魁夷

発売予定　第一巻7月，第二巻9月，第三巻11月

B6判
特製本・ケース入り
450ページ

定価各　700円

株式会社
フレーベル館

初期の誘導保育の実際

ここに再録する二篇の実例は、本誌にもっとも古くあらわれた初期の誘導保育の実例である。大正七年、大正十四年という古い時期のものであるが、新しい試みの意欲にあふれたものであり、現代の読者にも参考になると思うので再掲載することとした。

動物園あそびの記（大正七年）

とよ子

鳥や獣の標本がその丸い眼を見張ったきり、昨日も今日もおなじようにガラス戸棚の中に立ち並んでいる。あれを利用して動物園を作ったらとの説が出て、さて作ろうとはしたが標本だけでは余りに殺風景である。余りに単調である。子供は象が好きである。獅子も好きである。水族館も親しいものである。どうかしてこれらも作りたいものである。切符や入場券を売る事の好きな人に入場券売りもさせて見たい。入口も賑わしく飾って見たい。子供らの小さき弟妹が見物に来た時に動物園みやげもやりたいと、考えはその場所にと充てられた遊戯室の隅から隅へ、壁から壁へと次第に広がって行く。次第に濃くなって行く。とうとう象、獅子、虎、熊、駝鳥の五つは壁画で補うこととした。それでその五つと入口左右の壁裏表に貼るための森四枚とを教生（本校四年生にて実施保育練習生）にたのんで画いてもらう事にした。頼まれた人々は紙を何枚も何枚も継いで部屋一ぱいに広げて画き始めた。殆

んど実物大の象を描こうという。なかなか大変な事である。その輪廓をとるだけでも大変である。大きな刷毛で思い切り大きく画いている。細かい所が分らなくなればわざわざ動物園に見にいく。かくまでして一生懸命に画いた。その尊き本真剣な努力。子供は之を見た。実に之を見た。単に絵の進行のみを見たのではなかった。「象はまだかなあ」と毎日の様に待ち遠しがられながら、象は一日一日と形と色とを成して行った。「僕は早く象が切りたいなあ、まだかなあ」と、とんでもない時に鋏を握って待ち詫びた子供もあった。愈々象が出来上ったとなると、その悦びは一通りでない。「象が出来ましたよ」と言えば、見たさ、切りたさに、何もかも捨てて慌て出した。やがて遊戯室に広くござが敷かれ、その上に象が広げられた。「やや大きいなあ」「先生切らせて下さい」「僕、鼻ッと」「僕あたまッと」「僕脚ッと」「僕背中ッと」各自が欲する所を申し出して、鋏を握ってすわった。先生に更に範囲をきめてもらって、各自切り始めた。何れもベストをつくそうと鈴の様な眼を見張って夢中になって切っている。すわっているもの、足を出しているもの、腹ばいになっているもの、そのとりどりの姿に力がこもる。大きな象を小さな人が八人がかりでまるで象に吸い込まれた様になって切っている。何という尊い光景であろう。やがて七、八分したかと思う頃象は紙から抜け出した。子供も夢中、大人も夢中、壁に掲げて見なければ承知出来ない。取りあえず、仮に正面の壁に掲げられた。先生はこの時、子供がどんなに喜んだか、それを見、それを喜ぶ余裕もなく、自分が先づ象につり込まれてしまった。象は左に右に上に下に動かされ、なかなか位置が定まらぬ。四肢の下の方は柵にかくれて見えないことにするはずであった象は、とうとう絵画きの先生に継ぎ脚をせられ、床迄引き降ろされて、先生も象も初めて落付いた。長い鼻には一握りのわらがまき上げられ、本当の象の様な気がした。象はかくして遂に出来上った。ほんとうに生きている様に出来上った。駝鳥、獅子も、虎も熊も同じ様にして作られた。虎の脚の趾を切り殺いだとて泣き真似遊びをしている子供の群もあった。獅子、虎、熊には紙製の檻も添えられたので、すっかり動物園らしくなった。

これらの騒ぎの中で、お土産用の風車を作った人も多かった。赤や紫や緑の紙で風車を作り、それに「ドウブツエンミヤゲ」と覚束なげに、しかし全力を挙げて子供が書いた小さな紙の札が附けられた。そして出来上った沢山の風車は目が醒むる様に美しく籠に盛られた。二籠も。

入場券も子供が作った。幅二寸、長さ三寸位の紙に猫の型紙を貼りつけ「入ジョウケン」と、これも子供が書いた。

此日は土曜日であった為、子供を早くかえさなければならぬ。仕方なしに十一時半頃にかえした。あさってを楽しみに待たせて。

さて午後になってから、先生は月曜日をまちかねて、とうとう総出になって動物園を作り始めた。ありったけの標本は運ばれ清く塵は払われた。大きな鳥と獣は壁画の森を背景に卓子の上に並べられ、各の間は積木でしきられた。池は略円形に水色の紙を敷き周囲は長き腰掛で囲み、真中に大積木の箱（約九寸立法）六個を以て積まれた水禽の家を作り、其中には藁を敷き、四方には積木で段々を積み、屋も又積木で作った。標本の水禽に比べてはいかにも小さい家でありながら、それでも少しも不調和に見え無かったのも不思議である。池の片隅には庭から拾って来た小さい樋で作られた餌流しもあった。餌入れには生きた鰯も入れられた。禽の標本は其脚の下について居る台がいかにも殺風景に見えるので、これは水になっている紙の切れ目をこしらえて、其の下へうまく隠した。禽はあたかも人待ち顔に静かな水を游いでいる様に見える。

次は水族館作りである。岩、海草、章魚、烏賊いろいろの魚は画用紙に書かれ、切り抜かれ、水色に採色せられた大きな紙に糊付けにせられた。これがやがて三つの窓の硝子へ外から貼り附けられた。硝子を通して見るという趣向が之についての工夫であった。単に水族館を見るだけでは物足りないということになって、丁度他の部屋に作ってあった魚釣場をここへ移すことにした。それには水族館の一隅を三角形にかこんで、其中に水色の紙を敷き、石炭利用の岩、実物の栄螺などを配置して海が出来上ったのである。其の海に玩具や手製の魚が沢山游いでいる。その魚の一つ一つには口に針金の小さい環が附けられている。釣針を此の口にひっかけて釣らせようというのである。海岸には細竹で作った釣竿十数本と、釣り上げた魚を入れる為の籠とが準備されて、その傍に、これも子供の書いた「ドナタデモオツクリクダサイ」という札が掲げられた。先生達は小鳥の配置と、入口の装飾とをあさってにかけていた。気がついて見れば短き冬の日は此時西に傾き残して、一先ず引き上げた。三分の二出来上った動物園の夕闇に大きな象が一層ほんものらしく浮き上って居るのを自分ながら感心しながら。

月曜日の朝早くから入口の装飾に取りかかった。予て子供と一緒に作って置いた半紙大の国旗七、八十枚を繋いで入口の中央から左右にかけ渡した。赤い日の丸は背景の森に映えて一段と美しく輝いた。そして、動物園開園日の楽しい気分をぐっと引き立てた。入口の柱には「お茶の水どうぶつえん」と、子供の字の力の籠った達筆なこと。

次の仕事は小鳥の配置である。いろいろ工夫した末に、グランドピアノの上に毛布二枚、濃い緑の蚊帳三張を使って小山を作った。そして所々に盆栽と、ほんものの笹とをあしらった。其小山の上に、小山の上の木々の枝に、可愛い小鳥はそれぞれ其の性に

合う様な適当の姿勢に配置せられた。歌って居る様なのもある。餌をあさって居る様なのもある。これでまあやっとのことに動物園が完成せられた。床は清く拭われ、いかにも気持よく整頓せられた。園内の動物はどれもどれも朝の空気に生々している様に見える。

　やがて動物園の開園という段になる。子供は先生と一緒に見物に来た。「入口」と書いた左側から入って左へと廻った。無言で驚きの眼を張っている鳥、鷲、雉、鶏、梟、鷹と順々に見て部屋の角を曲れば水族館である。好きな章魚もいる。きれいな珊瑚もある。鯛も比良目もとびうおも水母も游いでいる。列を作った沢山の可愛い目がいかにも珍らしそうに窓硝子製水族館を覗いて廻る。次には魚釣場である。此所は又一層の面白さである。これだけは上野の動物園にもない新装置である。小さい釣手は代る代る魚を釣る。容易にはかからない。其の代り釣れた時の嬉しさは本当の魚を釣った様な得意な顔をして竿を上げている。又角を曲ると熊、虎、獅子、それから駝鳥がいる。駝鳥の他はしっかり檻に入れられているので流石の猛獣も怖ろしくない。ここは男の子の大評判。「先生、動物園がおしまいになったら僕に虎と獅子とを下さい」「僕に駝鳥と熊とを下さい。」と先生にねだった小さい熱心家もあった。之等を見終ると次は小鳥の山である。鳩、雀、雲雀、鶯、ツグミ、セキレイ、ヒヨドリ、燕、鵙等十六、七羽もが楽しそうに群っている。ここには女の子が大勢「可愛いのねえ」といいながら立止っている。次が象である。象大王である。小さい人達は其の前にくると一層小さく見える。その小さい来観者が首を上下に動かして頻りに見上げ見下ろしている。何といっても子供の一番好きな象である。動物園中最傑作の象である。男の子も女の子も、ここに集ったきり動かないのも無理はない。其傍に用意せられてあった餌皿の塩煎餅はいつの間にか象に投げられていた。猿の餌のお芋や胡蘿までも、鳩の豆までも大変な人気である。

　此所で遊び足りた次は、栗鼠、兎、猩、猿である。猿は手や足に胡蘿蔔とお芋とを持たせられていた。兎の背中をそっと撫でて見る子供もあった。斯う順々に見て来ておしまいが中央の水禽の池になる鴨、鷺、鴛鴦、鵞、鶏、雁、などが悠々と游いでいる。子供は池の周囲に置かれた腰掛に縋って池を覗き込んで居る。「生きた鯰がいる」とふれ歩いている人もあった。実際に餌を流させる事の出来なかったのは残念であった。餌待ち顔に樋の榜に立って居る鷺や鴨を見た時は実際大人でも一寸餌を流して見たい様な気がした。

　こうして静かに丁寧に一巡した後、其後は勝手に思い思いに幾度も見物を繰り返した。本当の動物園に来た様な気分がして居るらしかった。其中に絵の好きな子は此所で動物の写生を始めた。

小さい板の上に紙を載せ、所々のベンチに腰をかけて好きなものを写生していた。一番多く写生されたのは象で、駝鳥、虎、兎、猿、鷲もなかなか人気を集めていた。又或る日は此所で遊戯や唱歌もした。山の奥のピアノから色々の唱歌が響いてくるのも言うに言われぬ面白さであった。蛙になってお池の中を跳んだり、海岸に行っては海の歌をうたったり、小山の前に並んでは鳩、鶯、雀、雲雀などの唱歌をうたい、又遊戯をした。或る日は又腰かけて象のお話も聞いた。それがどんなに珍らしく面白かったろう。唱いなれた歌も遊びなれた遊戯もいつもとは違った新しいものになった。

開園の翌日には本校、附属高等女学校、附属小学校等に動物園案内が掲示せられた。やがて動物園にも、廊下にも大きな足音や小さい足音が賑わしくなった。中には小学校の団体見物もあった。子供のお母さんや小さき弟妹の影も見え出した。幼稚園は恰もお祭り、しかも大祭りの様な賑かさであった。おみやげの風車はすぐに無くなって幾度も幾度も作り足された。他所の幼稚園の小さい方々も先生に連れられて、わざわざ此動物園へ遊びにいらした。そのお客さんからは自ら採集せられた沢山の種子や、五年前に挿木にしたのが今は立派に花の咲いた柳の大きな枝などをお土産に戴いた。何という美しい尊いお土産であろう。動物園へ植物園から贈物よなどと言って喜んだ人もあった。時間は短かったが、それでも楽しそうに遊んで頂いて、子供も大人も象も、水母も。此珍らしいお客様をどんなにか悦んだ事であろう。

かくして二月四日から九日まで、全園何れも動物園の人となって遊びくらした。最後の日、この楽しかった遊びを偲ぶよすがにもと、象を始めあれやこれやと写真にとって、わが大動物園は静かに閉じられた。

森といっしょに大事に巻いて仕舞われた。象よ、虎よ、獅子よ、さきくあれ。またの日まで。さらば。

此の動物園の保育上の意義

一、幼児の喜び楽しむこと。

二、幼稚園生活の或は単調に流れ易きに対する適当の変化。

三、動物剝製標本の幼児教育的使用の一法。

四、幼稚園においては幼児をして製作作業せしむるのみならず、教育者自身が興味を以て一生懸命製作する処のものを（此動物園は保母教生の工夫努力になる）幼児をして之も熱心に見せしむるも亦保育上大に価値あり。之れ此動物園の準備設置の間に於て著しく立証せらし事なり。

五、獅子、虎等、の諸動物、殊に象の如き大動物の切りぬきは幼児の作業として雄大なること。（此諸動物は幼児をして共同的に切りぬかしめたり。象の如きは約七人にて五、六分を要し、幼児の最も喜べる処なり。）

六、此の動物園は当校内一般の観覧を案内し、又幼児の弟妹等の来観を迎えたり、自分達の愉快とする処のものを多勢の人の賞観に供するということは、幼児達に快調にして社交的なる一種の祭典的喜悦を経験せしむるに於て頗るよき機会となれり。

七、幼児をして此の動物園に写生を試みしめ、又之に関する談話及遊戯を試みしめ平日の描き方話し方遊戯等の場合と殊れる結果を得しは、初の計画に思い設けざりし一種の利用法なりき。

婦人と子供　第十八巻　大正七年　第三号　110〜118頁

八百屋遊び（大正十四年）

及川ふみ

今日は朝から雨で、内あそびにはよい日であります。この間からみんなが一生懸命にしてこしらえたお野菜（これは画用紙に野菜をかき、それをきりぬいたものであります）が硯箱のふた一杯にたまっています。早速茶色の紙で小さい丸を沢山うちぬいてお金をこしらえました。そこで

「今日は八百屋さん遊びをしましょう」

というと、大よろこびで五、六人の子供達は物置へはしりこみました。そして自分達の背よりも高い衝立をわいしょわいしょとお部屋へかつぎこみました。これが彼等の一つの愉快な遊びとなりました。四、五人の女の児は八百屋さんになりたいので、衝立の中にはいりました。そして野菜の箱からいろいろよりわけて奇麗に売り台の上にならべました。見ると

いちご、なつみかん、ばなな、りんご、めろん、すいか、だいこん、にんじん、はす、かぶ、たけのこ、きうり、なす、さやえんどう、そらまめ、とまと等

みどりやあかや、黄色の色とりどりも奇麗でありますし、又一つ一つの形もなかなか上手であります。下手な大人のかいたのよりもよっぽど味のあるものばかりであります。尚、ならびきらないお野菜は箱の中に沢山のこっていて商品はなかなか豊富にあります。

銀行屋さんになる男の幼児たちも又せっせと別の衝立を物置からかついできて、八百屋さんの反対の側へ店を出しました。そし

て茶色のお金をもって衝立の中にはいりました。

買手の人たちは先ず銀行へいってお金をひき出しました。もっとも一度に二十銭ずつの引き出しときめました。それは他の組の人たちにも大勢にうりたいためであります。

二十銭もった人は八百屋店へいって沢山の野菜にまよったすえ漸く十銭でいちご二つに、又十銭で大根一本買いました。

次の人は二十銭だけばななを買いました。それから私にはそらまめ、私にはきうり、私にはにんじんと、つぎからつぎとつめかけてくるお客様で、お店は満員の盛況であります。衝立がおされて倒れそうなのでしっかりおさえねばならぬという有様であります。いちごなどはなかなかおいしそうなので、八百屋さんはいく度も箱から出しているという有様であります。

お隣の組へもそのつぎの組へも開店の披露をしたので小さい組の人たちがはずかしそうに、そしてもの珍らしい顔して先生につれられ、銀行でお金を出してお店へ来ます。あかいにんじんや、そらまめを買ってかえる。

入れかわり立ちかわりする大勢のお客様ですっかりお野菜は売り切れとなりました。

銀行屋さんも八百屋さんも大繁昌だったので大満足でやすんでいます。お客さんたちも沢山のお買物をお部屋の角で整理して紙につつんでポケットに入れました。

「先生またこんどね」「わたしはこんど八百屋さんにしてね」「僕はこんどは銀行屋さんにね」「わたしはこんどは買わせて下さいね」と、つぎつぎにこの次ぎの役わりか先生に承諾をうけて安心してあとかたづけをいたしました。

こんな風で大さわぎの八百屋さん遊びは丁度三十分ですみました。

こんなに前々からいろいろの野菜をこしらえておいてうるのも面白いけれども、自然にたくさん恵まれている地方などでいろいろの雑草をつみ集めてきてきうりにし、おねぎにして、椽台の上にならべて、小石のお金で買うのも又どんなに面白い事でありましょう。

さてお店に作った衝立は口絵の写真で大体わかりましょうが全部木製であります。高さは五尺、長さは六尺のもの二枚を蝶つがいで二枚折りにしてあります。これは売り屋遊びだけでなく、おままごと遊びにも作える様に店でない方の半分に三尺の幅の出入口をつけてあります。

また銀行屋の方の衝立は正面は高さ五尺幅六尺で、左右の両横は二尺位蝶つがいで横に折れるようにしてあります。これも郵便局遊びにも又小さい人形芝居の舞台としてもつかわれるのです。

幼児の教育　第二十五巻　大正十四年八月　第五号　51頁〜53頁

モンテッソリー断想

内山憲尚

一、芽を出さなかった種

モンテッソリーの名前は学生の頃から聞いてはいたが、モンテッソリーの教育を初めて知ったのは大正一四年である。

いつもの通り神田神保町の電車通りの古本屋を覗いていたら、目についたのが「モンテッソリー教育法真髄」という六三六頁の大冊の本で、たしかその当時の金で一円五〇銭だったと思う。（今日の二千円以上だろう）なかなかの大金である——清水の舞台からひと思いにとんだ気持ちで買って帰った。

大正四年九月一七日発行、著作者は当時教育界に新しい指導的地位を確保していられた、河野清丸氏で、発行所は北文館（定価一円四十銭）この本を通読するに及んで、モンテッソリー教育の外郭を知ることができ、モンテッソリーに関心をもつようになった。

「モンテッソリー教育法真髄」はモンテッソリー女史がローマのサンロレンゾ・マルシ街に開設した、彼女の「児童の家」に独自の幼児研究理論を実験したものをもとにして書いたといわれる「モンテッソリー教育法（The Montessori Method—1912）」をもととして、いくらかの評論解説を加えたもので、実に親切丁寧に訳述されている。

河野清丸氏はモンテッソリーの教育法に非常に感激させられて、これをわが国に紹介普及しようと決心された。同著の自序に「初めモンテッソリー教育法の世に伝わるや、余は唯時代の新思潮なるが為、単に好奇心の駆る所となって、之が英訳を繙けり、而して読むこと三〜四〇頁、其の研究の真面目なるに驚き、愈々進み益々襟を正すを禁ぜず。再読三読此の書の如く余を刺衝し、啓発したることなきを感じたり」とある。

直ちに筆をとって、大正三年に「モンテッソリー教育法とその応用」を出版して、モンテッソリーをわが国に紹介した。この本は、あまりにも簡単すぎたので、続いて、全訳に解説を加えて出版したのがこの『真髄』である。

河野清丸氏は更にモンテッソリーの研究に没頭し、昭和三年には「門氏教育法の詳解及批判」という大部なものを出していられる。

河野清丸氏が、モンテッソリーの教育の普及のために多くの努力を払い、立派な著書を数冊も出版して宣伝開発につくしたが、なに故、モンテッソリーがわが国に完全に紹介されなかったかというとその原因に三つのものがあげられると思う。

第一は、河野氏が教育学者であり、ことに一般教育、普通教育界の人であったということ、第二は、氏が幼児教育とは関係が少く、幼児教育界への浸透が不充分であり、ことに幼児教育の実際面への働きかけが足りなかったこと、第三は、当時のわが国の幼児教育界はフレーベルの教育思想及び教育方法一辺倒でとうてい、その他の幼児教育思想をとり入れるだけの余裕がなかったことであると考えられる。

河野清丸氏のまいた種は、とうとう芽を出さずに今日になったわけである。

二、モンテッソリー

マリア・モンテッソリーは一八七〇年三月イタリアのミラノに生れた。フレーベルが生れたのが一七八二年だから、フレーベルの生後八八年に生れているわけである。

フレーベルが彼の幼児教育思想「人の教育」を世に出したのが一八二六年であるからその時にはモンテッソリーは四四才で、ローマ大学で哲学科を出て、国立異常児学校の実際教育にも関係を持っていたのだから、おそらくフレーベルの「人の教育」にも目を通していたことだろう。しかるにモンテッソリーの著書には「人の教育」のこともフレーベルのことにもふれていないのは、モンテッソリーが、彼女独自の科学的感覚的なオーソドックスな幼児教育法を樹てようという気持ちからではなかったろうか。

モンテッソリーは、ローマ大学医科に入学、一八九四年医科を卒業、イタリア最初の婦人ドクターとなる。二四才の時である。大学卒業後、その附属病院の助手として、主に精薄児を取り扱ったが、その間フランスの有名な精薄児教育者セガン（E. Seguin）の影響を受けて、精薄児は医学上よりもむしろ教育の問題であると唱えて、ローマに国立異常児学校を作る機運を盛り上げ一八九八年これの設立を見るにいたった。同校開校と同時にその実務に当り二か年余世話をした。

その間ロンドンやパリーに精薄児教育の研究視察に行き「異常児の教育法は正常の幼児にも役立つものである」と言う確信を得た。

そこで、教育学、心理学等の研究を思い立ち、また、ローマ大学の哲学科に再び入学し、七年間実験心理学、教育的人類学の研究をした。かたわら各小学校の児童について研究を続けた。

たまたま一九〇五年にローマの貧民街建築改良協会がその附近に教育施設を作ることになったので、その依頼を受けて三才から七才までの子どもを収容して、**児童の家**（Casadei Bambini）を一九〇七年一月に開校した。女史は実験学校として教育理想を実際に移した。

イタリア各地にも児童の家が設立され、更に海外の和、英、独、米などにもモンテッソリー主義幼児教育が次第に普及してきた。ところが女史のこの運動が建築改良協会自体の性格から離れてきたので終に一九一一年同協会と袂を分ち、独自に幼児教育に専念した。

一九一三年にはローマで指導講習会を開き以来、各国で国際講習会を開き世界的運動を展開した。英、米をはじめモンテッソリー協会が生れて研究の歩を進めている。評価を怠っていた本国のイタリアでも一九二九年二月にローマ市郊外にモンテッソリー教育実験学校を設置して、モンテッソリー教育の再認識とこれの幼小学校教育の革新を期すことになった。

三、モンテッソリーの教育

モンテッソリーの教育は、児童の性善説を認めその上に立てられたものである。故に児童の人格を認め、児童の本性の個人的自然的発達を許すことから自由をその教育の根本要件とした。（後年ムッソリーニのファシストが政権をにぎるようになり、一九二三年頃から国家統制が行なわれることとなり、モンテッソリーの自由主義教育に対しても国家主義的干渉がなされ、ついにモンテッソリーはオランダに亡命することになったのである）従って教師は児童のよき観察者的立場において教育に当り、無暗な干渉、矯正（きょうせい）を行なってはならない。児童自身の自発によってのみ仕事をなし、教育活動が行なわれる。故に訓誡や罰は一切用いてはならない。訓誡や罪は子どもにとっては「心の腰掛け」にすぎないといっている。

以上の教育理念は多分にフレーベルの教育理念と相通ずるものがあり、あるいはフレーベルの「人の教育」に影響されているのではないかとも考えられる。

フレーベルとちがうことはそのすべてを、医学、心理学、生物学、人類学に結びつけて基礎づけせんと試みている点で、女史自身も科学的教育法であると称しているゆえんである。

モンテッソリーは環境の教育については生活と結びつけ常によき環境を構成しその中で子どもを生活させることが必要であると論じている。

モンテッソリー教育の特徴は教具に見出すことができる。あらゆる感覚――触覚、筋覚、温覚、味覚、視覚、聴覚、嗅覚は、科学的

立場から、全教育の場に活用され生かされなければならないとし、百種類に及ぶ感覚教具が考案されている。

児童の家のプログラム

○ 朝礼・会話

朝の挨拶、服装、持ちものの整備、会話は話し合いで前日のできごと、教師が宗教的な話などをする。

○ 実物教授・知育

時間	内容	適要
9.00～10.00	朝礼・整備・会話	前日のでき事・宗教的な話
10.00～11.00	実物教授・知育	観察・名称教授・感覚教育
11.00～11.30	体操	
11.30～12.00	昼寝	
12.00～ 1.00	自由遊び	
1.00～ 2.00	戸外遊び	自然教育
2.00～ 3.00	手工	粘土細工など
3.00～	戸外	

知育は次のようなものが含まれる。

知育
- (1) 内容
  - 名称教授
  - 観察力
  - 感覚の複雑なもの（目かくしをして当てる）
  - 幾何形態の分解（辺、角、中心などの分解）
- (2) 自発教授――教師より注文せず、児童自ら進んで研究する。

○ 体操

体操を次のように分類している。

体操
- (1) 人類学的体操――人類学上の原理から、発達の不完全なものを補う（機械体操、平行棒など）
- (2) 自由体操――機具を用いない体操
- (3) 教育体操――指頭練習（ボタン、ホック、紐結びなど）
- (4) 呼吸体操――呼吸、発音練習

○ 自然教育

動植物の飼育、生活現象の観察、自然の観察、自然に対する感情など

○ 読み方書き方

線、三角など、スペル練習など――カードを用いて行なう。

○ 言語

話し方、正しいアクセント、静粛練習など

○ 数

実物計算、長短（メートルによる）計算箱（カードを用いてやる）

彼女の感覚教育の思想は、人体の諸機能は精神物理的関連にも役立つものと確信し、感覚教育は知的教育の基礎となり得るものとなし、従ってそれは知育に先行すべきものとした。そして三才から七才までの児童にとって幼児たちがそれを繰り返し使用する間に、自ら誤りを訂正し、ものを正しく判断し、行為を正しく決定する知的能力が自然に養われてゆくものであるとなした。

モンテッソリーの教育思想体系を表示すれば

根本……性善説

基礎……医学、心理学、生物学、生理学、人類学

方法……感覚（自由、環境）、教具

内容……知育、体操、自然教育、読み方書き方、言語、数、手工

四、インドとモンテッソリー

ムッソリーニのファシストに追われて、モンテッソリーはオランダに亡命した。オランダにおいても欧州の大戦乱の余波を受けてあまり活発なる展開はみるに至らなかったようである。

女史はインド行きを思い立って、一九三八年マドラスに落ちつき、ここでトレーニングスクールを開いた。

それまでは英領インドとして、英本国からの宣教師が布教の立場で開設した、キンダーガーテンがあって、たいていフレーベル主義により、保育料も無料であるか極めて低廉なものであった。

モンテッソリーの理想は一クラス一〇名として小規模の施設で開園でき、ミッション的な性格をおびていないということが、インドの共鳴を得た。ことに、タゴールやガンジーなどの要人の協力援助を得るようになって、トレーニング・スクールもマドラスの外ボンベイ、カラチ、アーメダバートなどで一か年ないし二か年のコースで開かれ、ここで養成された人たちが、モンテッソリー教育の中心となって、農村にまで普及するようになった。

ガンジーは、ダキイルフセイン副大統領にデリーにモンテッソリー主義幼稚園を開かせ、これを「ナイタリム」と称した。ナイタリムとは「新しい教育」の意である。これにならってインドの各地にモンテッソリー主義の幼稚園が生まれた。現在インドにおけるモンテッソリー幼稚園の概数は次の如し。

マドラス	一〇〇〇
ボンベイ	一〇〇〇
カルカッタ	五〇〇
デリー	二〇〇
ベナレス	二五

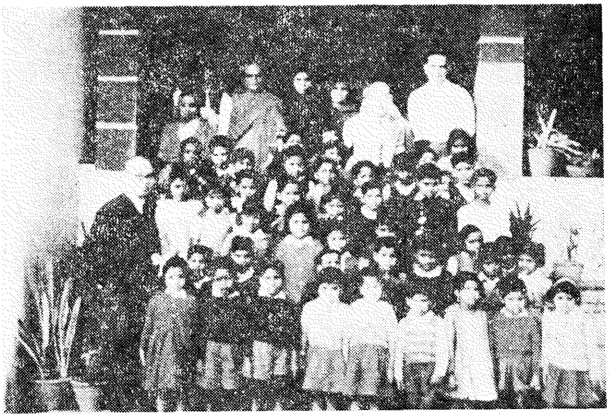
パトナ　　　　一一

その他　　　三〇〇

インド中に三千三〜四百から四千ぐらいと思われる。(キショレ・ダル幼稚園ラニジイト・バハイ氏談)

インドのモンテッソリー教育研究会の本部はカルカッタにあり、A・M・トーステンという人が会長をやっているそうであるが、あいにく筆者がカルカッタに着いたのが土曜日の午後で、翌日は日曜なので、会長に会えなかったのは残念であった。

インドのキショレ・ダル幼稚園

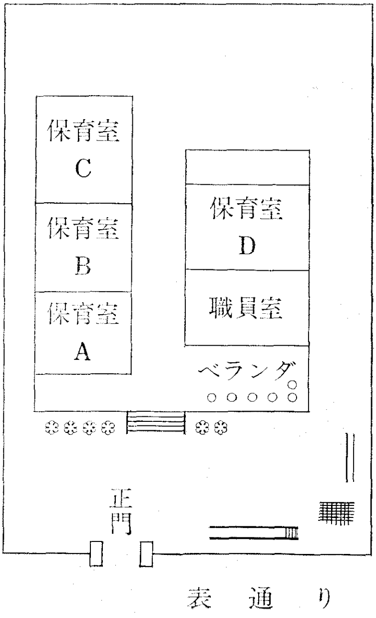


五、キショレ・ダル学園幼稚園

今回のインド旅行中、どこかでモンテッソリー主義幼稚園を見たいと思っていたら、パトナでうまく日があきそうなので午後パトナ市の中央にある、キショレ・ダル幼稚園を参観させてもらうよう交渉しておいてもらった。

大通りの表通りに面した、平家建ての幼稚園で、インド式で床の高い建物である。敷地は一五〇坪ばかりの中に七十坪あまりの木造建築で正面の門から入ると前庭が四〜五〇坪で、ここにスベリ台、ジャングル・シーソーなどの運動具がならんでいる。正面玄関のところがベランダになっていていろいろな植木鉢がたくさん置いてある。

キショレ・ダル幼稚園



保育室は四室で、一〇坪から一三〜四坪のもので窓が小さいので部屋は明るくない、カラー写真がとれないくらいで、白黒のフィルムを持って行っていなかったので室内の写真がとれなかったのは残

念だった。

年少組(A)(B)は七〜八名で年長組(C)(D)は一三〜四名であるから一〇坪から一三〜四坪の部屋で充分である。――モンテッソリーの理想が一クラス一〇名というので園長はこれを守っている。しかもこれがインドでの常識である。アメリカでも一クラス二〇名からせいぜい三〇名である。日本のように四〇名から五〇名のところは世界のどこにもない。

年少組は円型に足をなげ出してすわっている。みんなはだしだ(これはインドの風習で子どもは、小学校でもはだしである)年長組は机にかけて作業をしている。

保育の実際をパハイ園長が案内してくれた。ことばは家庭でインド語(ヒンズー語)を用いているので先生はヒンズー語を使用しているが年少組から英語を教えている。

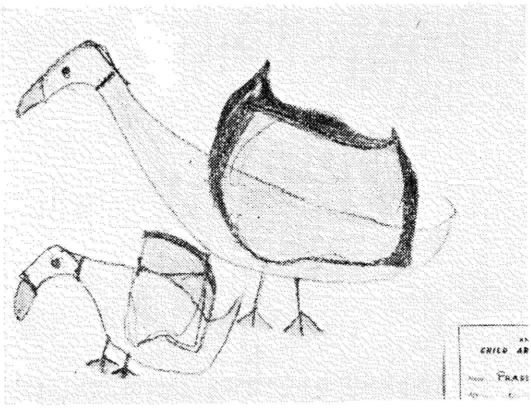
ちょうどAクラスでは英語の時間だったが教科書を使用せず、A、B、Cのカードを並べてネコの絵の下にC・A・Tを置いてネコのスペルを教えている。モンテッソリー法による教育である。

次のクラスではお話をしていた。円型になった一〇名あまりの子どもに先生がお話をしている。童話らしかった。部屋の周囲には机がならんでいて、モンテッソリーの教具が数種類ならんでいる。

年長組では算数でこれもモンテッソリー式の計算板を使用して加算をやっていた。今日わが国の一年生の算数のように眼から入れる方法である。園長は加減の初歩は年少組でやり年長組では掛け算の初歩を取り扱うといっていた。

壁には幼児の描いた絵が貼ってあったが、わがくにのようにクレヨンのやわらかいので自由に描かせるようなのはなく、鉛筆画か固いクレヨンの絵である。

固いクレヨンでかいた絵 — 6才児



製作は単純で切り紙、貼り紙などが多い。このパトナの町には州立の工芸研究所があって見学したが、なかなかいいものがあったが幼児の教育にはその片鱗(へんりん)は見ることができなかった。

保育の目標として次の六つのものをあげている。

○友情と明朗な気持ちの育成。
○生活に役立つ新しい技術を身につける。
○才能を伸ばし教養を高める。

○共同生活、どうして他の人と仲よくしていけるか。
○新しい友だちを迎え、新しい土地や新しい町を知り、新しい知識をもつ。
○心と身体を健全に伸ばす。

バハイ園長は、先年アメリカのモンテッソリー研究大会に出て、アメリカを視察してきた熱心な教育家で「常に新しいことを求め、常に前進することのみが教育の生命です」といい、職員室の上にかかっている、学園のモットー "Tomorrow is Our's" と大書したものを指した。日課フロについては夏と冬とではちがい、夏は日中が休みになるが、基準のものを示せば次の如し、

午前——朝・集まり（朝礼）
紹介（その日の予定）
集団遊び
保育室の保育
昼食
休けい

午後——散歩
保育（スポーツ・音楽・ゲーム・スカウティング等）
見学（社会観察）
お帰り
放課後の職員会

となっている。なお、スカウティングというのは、インドではボーイスカウトが盛んで、小学校教育の中にボーイスカウト教育がとり入れられてスカウト訓練をやっている。幼児にはカブスカウト的な訓練やゲームを取り入れているのである。

経営と管理はわが国のように文部省があって画一的な統制をやるのではなく、アメリカのように州によってまとめており、州の教育会が関係をしている。

ほとんどが私立の幼稚園でキショレ・ダル学園にしても園長の個人経営で幼稚園と孤児とを預って、職員は五名のクラス担当の女の先生の外に男子の主事一人、婦人の主事一人で四〇名ぐらいの幼児で、保育料は一二ルピーである。インドでは大学卒業初任級が七〇ルピーで小学校長級で一二〇ルピーで、一二ルピーの保育料の出せる家庭は中以上の家庭だそうである。それにしても四〇名の園児では経営はたいへんだ。園長は「州からの補助もなく苦しい経営を続けています。創立以来二〇年この狭いところでがまんしてきました。しかし教育をするという仕事に打ち込んでいることをありがたいと思っています」と言っておられた。

わが国の近頃の幼稚園のように、開園すれば一五〇名も二〇〇名も集まり、一組四〇名以上五〇名もひどいのになると六〇名もを収容して、幼稚園を企業と考えている園長にバハイ園長のこの姿を見せてやりたいものである。

（駒沢大学・鶴見女子大学）

二才児の生活と保育

＝教材やカリキュラムの観点から＝

久富御治代

保育所の入所児は、年々その年令が低下し、三才未満児が次第にその数を増している傾向である。その中での二才児の保育が、どのような形で行なわれているかをみると

二才児だけの組を作って保育している。	9％
三才未満児の混合保育をしている。	68％
幼児と混合保育をしている。	23％

（昭和三十九年十月実施　名古屋市、一宮市、岡崎市、瀬戸市、各公立保育園四十五園の実態調査による。）

となっており、ほとんどが混合保育の状態であることがうかがえる。

このような混合保育の場合に、そのカリキュラムはどうあったらよいか、常に問題になるところであるが、混合保育組のカリキュラムを作る前に先ず各年令の標準的、系統的なカリキュラムがなければならない。その基準をもとにそれぞれの年令の子どもの活動をくみあわせ、配列させて、その組のカリキュラムが作られるのである。

このような考えから二才児組の基準的なカリキュラムの作製を試みたが、次にその作製過程と結果をまとめてみることとする。

㈠　二才児の教育課題

二才児の発達からその特質をおさえ、教育課題を次のようにした。

(1)　身体機能を積極的に発達させる。
(2)　自立への強い指向をのばす。
(3)　社会生活の範囲を積極的に拡げる。
(4)　ことばの指導をとおして、表現力や理解力をたかめ、さらにことばをとおして思考や概念を育てる。

（日本保育学会第十八回大会　田代高英氏発表参照）

以上、四つのことを中心に、その保育活動を考え、指導の内容をあげてみた。

すなわち、(1)は健康安全指導として、(2)は生活指導として、(3)はあそびの指導とした。(4)はあそびの指導の中でも行なわれるが、子

どもの生活全体をとおして、すべての場で行なうこととした。

(二) 保育活動のねらい

子どもの活動を指導する三本の柱、すなわち健康安全指導、生活指導、あそびの指導は、それぞれ三才、四才、五才と順次発展するもので、そこに一貫性が必要である。年令別に系統立てて考えた保育活動のねらいは（表1）のようである。

(1) 健康安全指導

二才児の場合は、子ども自身が積極的に活動するというより、もっぱら保母の配慮が中心になり、その適切な指導に子どもがついてくることをねらいとした。

(2) 生活指導

個人的生活指導では、基本的生活習慣を中心に、自分でしようとする意欲を持たせるようにする。二才児では、まだ能力的に自立ができず、手助けを必要とすることも多いが、「自分でしたい」という気持ちは充分うかがわれる時期であるから、この意欲を育て、やがて自立できる三才児の時に、行動面でも精神面でも完全に自立できるようにしたいと思う。

社会的生活指導では、その内容を社会的訓練(保母が中心)と、クラス集団の指導（子どもの活動が中心）とを含めた。そして二才児では、先生を中心として集団生活をするために、守らなければならない最低のきまりを、先生の模倣をしながらおぼえることがあげられる。クラス集団の指導は、四才児から重要なねらいとなってくるものである。

(3) あそびの指導

あそびの指導を、自然発生的なあそびの指導と、意図的なあそびの指導にわけ、いわゆる自由あそびとして、とかく放任されている子どもの活動を重要視し、そのあそびを次第に組織化していくことを強調した。

二才児では、特にこの指導がたいせつで、そのための保母の配慮が、充分検討されなければならないと思われる。個人のあそびを充分にたのしませながら、その間の友だちとのふれあいをたいせつにし、友だちとのあそび方、それに必要なことばなど、行動をとおして学んでいくことをねらいとした。

意図的なあそびは、やがて教科的活動に発展していく内容のものをふくめ、その活動が個人的活動から集団的活動へ、先生の計画が子どもの自主的な創造的活動に、それぞれ発展していくようにした。

二才児では、先生の意図したあそびに興味を示すようにし、とくにその指導方法、教材などに留意するようにした。更に、二才後期にみられるごっこあそびをとおし、集団生活での簡単な役割を経験するようにした。

表 1　　保育活動のねらい

項目＼年令		2 才 児	3 才 児	4 才 児	5 才 児
健康安全指導		・先生の配慮を中心として，先生の指導についてくるようにする。	・先生の配慮をうけながら，自分でも身につけようと努力する気持ちをもたせる。	・健康な生活に必要な習慣を大体身につける。 ・安全な生活に必要な習慣を大体身につける。 ・好ましい習慣をみんなではげまし合ってする。	・自分で自分の健康をまもることがほぼできるようにする。 ・安全な生活に必要な習慣を身につける。 ・健康的な環境づくりをみんなでし，年少児にも働きかける。
生活指導	個人的生活指導（基本的生活習慣）	・自分でしようとする意欲を持たせるようにする。	・基本的生活習慣が自立するようにする。	・自立した基本的生活習慣が，乱れないようにする。	・自分の行動の善悪を考えて行動するようにする。 ・自立した基本的生活習慣が身につくようにする。
	社会的生活指導（社会的訓練・クラス集団の指導）	・集団生活に必要な最低のきまりと役割を，先生といっしょにおぼえようとする。	・先生の助言により，園生活に必要なきまりや役割がまもれるようにする。	・いわれなくても園生活に必要なきまりがだいたいまもれるようにする。 ・クラスやグループの中で，それぞれが役割をもって活動する経験もつようにする。	・園生活に必要なきまりが身につくようにする。 ・お互にきめたことを守るようにする。 ・クラスやグループの中で役割をもち，責任をもって仕事をすることができるようにする。
あそび	あそび（自然発生的なあそび）	・個人のあそびを充分にたのしむようにする。 ・友だちとよくあそぶあそび方，あそびに必要な言葉を知るようにする。	・2，3人の相手を意識しながら，あそびを楽しむようにする。 ・先生の指導により道具をつかって友だちとじょうずにあそべるようにする。	・友だち同士の交渉を深め，グループあそびに発展させる。 ・あそびの中で，友だちの気持ちをお互に考えることができるようにする。	・グループの内容を深め，次第にグループ同士の交渉へと発展させる。 ・みんなと仲よくあそぶにはどのようにしたらよいか，自分から考えたり話しあったりする。
	課業（意図的なあそび）	・先生の意図したあそびに興味をもって，ついていくようにする。 ・ごっこあそびなどをとおして，簡単な役割や集団とのつながりをもつ。	・先生の意図したあそびを経験しながら園全体の流れに参加するようにする。 ・役割やきまりをとおして，個人と集団のつながりを理解する。	・先生の意図したあそびを個人的な経験から，グループ経験へと発展させ，クラスとしてのまとまりをもたせるようにする。	・先生の意図したあそびを自主的な子どもの活動に発展させ，クラスや園全体としてのまとまりをもつようにする。

二才児の場合は個人的なあそびが中心となることから、自然発生的なあそびと、意図的なあそびを区別することはむずかしい。また、社会的生活指導とあそびの指導も同じ場面で行なわれることが多い。

㈢ 年間計画（期の計画）

一年を四期にわけ、一期を四、五、六月、二期を七、八、九月、三期を十、十一、十二月、四期を一、二、三月とし、各期の大きな

表2　期の計画表

ねらい		子どもの姿	・先生と子どもの関係 ・子ども同士の関係 ・園生活への適応
	健康安全指導	生活指導	あそび
保育活動		個人的生活指導	自然発生的 （自由なあそび）
		社会的生活指導	意図的 （まとまってするあそびを含む）

表3　ねらい

第Ⅰ期	・きげんよく登園し，受持ちの先生や友だちとの生活に抵抗を感じなくなる。 ・先生のはげまし言葉により，生活の型をおぼえるようにする。
第Ⅱ期	・先生を中心として，子ども同士のつながりをもてるようにする。 ・規則正しい生活習慣の型をくずさないようにする。
第Ⅲ期	・子ども同士で短時間あそぶことができるようにする。 ・先生の計画したあそびに興味をもたせるようにする。
第Ⅳ期	・表現活動を充分にたのしませる。 ・自発的な行動のめばえを育てるようにする。 ・幼児集団に入っていくよろこびをもたせるようにする。

表4　子どもの姿

	先生と子どもの関係	子ども同士の関係	園生活への適応
第Ⅰ期	・集団生活になれず，情緒的に不安定であり，登園の時親からはなれるのをいやがる子が多い。（4月） ・先生に自分の要求を表現できない子が多い。（4月） ・先生になれて，ある程度意志表示をすることができるが，個人差がひどい。（5月）	・お互に抵抗を感じ，話しかけたり遊んだりしようとしない。（4月） ・友だちの名前をおぼえ，お互のあそびに関心をもつようになる。	・自分の部屋以外の生活に不安を感じる。
第Ⅱ期	・受持ちの先生の表情や話しかけによって，簡単な伝達がわかるようになる。 ・受持ちの先生に簡単な身のまわりの要求が言えるようになる。 ・先生に対して親しみの度合が深くなる。	・先生を中心として子ども同士のつながりがみられるようになる。 ・一人あそびの時は先生が見守る程度でもよいが，あそびがとぎれたり，友だちと衝突があったりする時は先生の相手を必要とする。	・自分の部屋以外の部屋にも親しみを感ずるようになる。 ・受持ちの先生以外の先生にも親しみを感ずるようになる。
第Ⅲ期	・先生の計画したあそびに，大体のこどもがついてくるようになる。	・あそぶ範囲が広くなる反面，友だち同士の衝突が多くなる。 ・あそびの中での力関係がややはっきりしてくる。 ・友だちに対して，なぐさめる，いたわるの感情がみられるようになる。	・他の組の子に親しみを感じ，いっしょにあそぶことをよろこぶようになる。
第Ⅳ期	・表現活動の要求が強く，先生にそれを要求することがみられる。 ・意識して先生に甘えたり，知っていることをわざとやらなかったりする態度がみられる。	・すきな友だち，きらいな友だちができ，張り合ったり言いあったりするがけんかは前期より少ない。 ・自分のことはできなくても，友だちのことを注意したがる。おせっかいがみられる。 ・組としてのまとまりがややできかけて，先生の働きかけに一定時間ついてくるようになる。	・3才児組に入っていくよろこびがみられる。 ・年長組の子といっしょにごっこあそびなどをするのを楽しむ。

表5　健康安全指導

	保健管理	環境構成	安全指導	体育的活動
第Ⅰ期	・病歴，生活歴の調査をし，家庭での生活の様子を連絡してもらうようにする。 ・いろいろの検査をいやがらないように前もって心の準備をする。（身体検査，歯牙検査，日本脳炎予防注射など） ・疲労について留意し，朝の視診を念入りにする。 ・病気になったら，早く休ませるようにする。	・便所，手洗場を清潔にする。 ・食器，午睡用ベッド，ふとんを清潔にする。	・登園降園の時は手をつないで歩くようにする。 ・園内であそぶようにする。	・短時間でも戸外であそべるようにする。 ・戸外遊具に関心をもつようにする。
第Ⅱ期	・皮膚疾患の予防と適当な手当てをする。 ・胃腸疾患に対する予防をする。 ・汗の始末を充分にする。 ・戸外では帽子をかぶるようにする。 ・食欲のない子への指導する	・室内の通風をよくする。 ・日おおいなどをして陰をつくる。 ・扇風機で涼をとる。 ・お茶を用意する。 ・着替えの衣服を準備する。 ・防虫剤をまく。	・危険な遊び場所を知り，安全な場所であそぶようにする。	・短時間の水あそびをする。 ・すべり台に上ったり下りたりする。 ・ボールをころがす。
第Ⅲ期	・流感，ジフテリアの予防注射をする。 ・薄着をするようにする。 ・ひび，しもやけの予防をする。 ・洗顔の連絡を家庭にもする。	・暖房器具は危険のないように注意して設備する。 ・室内の換気をはかる。 ・避難訓練に必要なものを用意する。	・先生からはなれないようにして，避難訓練に参加する。 ・暖房器具にさわらないようにする。	・戸外で走ったりとんだりする。 かけっこ　ひっぱりっこ　汽車ごっこ ・戸外遊具でいろいろのあそびをする。 ジャングルにのぼる。 鉄棒にぶらさがる。 手をとってもらって平均台を歩く。
第Ⅳ期	・ひび，しもやけの予防と治療をする。 ・感冒の予防と鼻汁の始末に注意する。	・室内あそびが多くなるので，机の配置に注意する。 ・ふとん類の日光消毒を度々する。 ・暖房器具の危険防止に注意する。	・登園，降園時の交通のきまりを次第にわからせる。 ・暖房器具にさわらせないようにする。	・天気のよい日はつとめて戸外あそびをする。 かけっこ　ボールころがし　鉄棒 ・室内で活動的なあそびをする。 マットあそび　つり輪あそび

ねらいをあげた。（表3）
（月令の少ない子の多い場合は集団生活になれるのに日数がかかるが、大きい子の場合は適応も比較的早いので、一期を四、五月とし、二期を六、七、八、九月としてもよいように思われる。）
期の計画は（表2）のような様式で、それぞれの活動内容を記入した。
子どもの姿は、先生と子どもの関係、子ども同士の関係、園生活への適応の三つの方向から把握し、集団生活での人間関係とその適応を明らかにした。（表4）
健康安全指導は、保母の配慮を中心とする保健管理、環境構成、安全指導に、子どもの活動を中心とした体育的活動を加えた。（表5）
生活指導の個人的生活指導は、その内容を、食事、排泄、睡眠、着衣、清潔とし、社会的生活指導は集団生活のきまりを主にまとめた。（表6）
自然発生的なあそびは、自由なあそびを中心に、子どもの望ましい活動と、保母の役割を含めた。
意図的なあそびは、あそびの内容を入れ、まとまってするあそびの指導を含めた。
あそびの内容及び教材の資料として、二才児保育をしている

表 6　　生活指導

	個人的生活指導					社会的生活指導
	食事	排泄	睡眠	着衣	清潔	
第Ⅰ期	・食事時の型をきめ，それをくりかえすことにより，食事時の習慣になれるようにする。 ・食事前後のあいさつ，手洗い（手ふき），みんなが揃うのを待つなど先生といっしょにする。	・先生に手伝ってもらい，きまった場所で，いやがらずに用便をする。 ・尿意をもよおしたら，先生に言う。 ・用便後の手洗いを先生にみてもらってする。	・午睡の型づけを，先生のまねをしながらおぼえ，いやがらずに先生の誘導についていくようにする。 ・ねむれなくても，先生がそばにいれば静かに横になれるようにする。	・持ち物（靴，帽子，かばんを先生におしえてもらいながら，きめられた場所におくようにする。	・いやがらずにタオルで顔や手をふいてもらうようにする。 ・手洗いのしかたを，おぼえるようにする。	・1日の生活の流れを，経験しながらおぼえていくようにする。 ・椅子，机の使用法になれ，やってみようとする気持ちをもたせる。 ・生活のきまりを具体的な身体の動きを通しておぼえるようにする。 ・友だちの名前を次第におぼえるようにする。
第Ⅱ期	・箸（スプーン）を使い，手づかみにしないようにする。 ・できるだけなんでもたべるようにする。 ・できるだけ1人でたべるようにする。 ・できるだけ，こぼさないでたべるようにする。	・少し手伝ってもらえばパンツを下げて自分でするようにする。 ・できるだけ便所をよごさないでする。	・午睡準備の型づけをおぼえ，できるだけ自分でしようとする気持ちをもつようにする。 ・午睡後の整容（顔ふき，シッカロールをぬる）をいやがらないでしてもらう。	・服の脱ぎ着になれるようにする。 ・脱いだものを少し手伝ってもらいながらたたみ，きめられた場所におくようにする。 ・靴を自分ではいたり脱いだりすることになれるようにする。	・あせもの手当てをいやがらずに先生にしてもらうようにする。 ・食事時の口のまわりや，手のよごれに気づくようにする。 ・よごれた手を自分で洗おうとする気持ちをもたせるようにする。	・簡単なあいさつができるようにする。 おはよう。 さよなら。 ありがとう。 ・みんなとあそぶ時の，簡単なきまりを知るようにする。 玩具はきめられた場所にしまう。 遊具の正しい使い方になれる。 ・先生の手助けにより，相手に自分の感情をじょうずに知らせるようにする。
第Ⅲ期	・あそびながらたべないようにする。 ・主食，副食を交互にたべることになれる。 ・食器を正しく並べるようにする。 ・先生の手伝いをして食器を並べたり，そろえたりする。	・あそびに夢中になってもらさないようにする。 ・用便後の後始末を自分でしようとする気持ちをもたせるようにする。	・起こされた時は機嫌よく起きるようにする。 ・はやく起きても，静かにするようにする。	・少し手伝ってもらえば前明きのスモックを自分で脱げるようにする。 ・服のたたみ方をおぼえるようにする。 ・ボタンやホックをはめたり，はずしたりすることに興味をもたせるようにする。	・鼻汁のでたのに気づき，少し手伝ってもらって，自分で始末するようにする。 ・うがいの仕方をおぼえる。 ・爪ののびたのに気づき，切ってもらいたがるようにする。	・お手伝いの仕事に興味をもたせ，それを通して「みんなのために」という気持ちをもたせる。 ・すぐ泣いたり，暴力に訴えたりしないで話をするようにする。 ・一つの遊具をみんなで使用してあそぶ楽しさを経験させる。 ・自分のものと他人のものの区別をわからせる。
第Ⅳ期	・きめられた時間内でたべられるようにする。 ・食事時のマナーがほとんどできるようにする。	・したくなったら，先生に言ってから，自分で用を足しにゆくようにする。 ・パンツの上げ下げ，後始末など一応自分でできるようにする。	・準備や後始末でできるところは，なるべく自分でしようとする気持ちをもつようにする。	・帽子を自分でかぶることになれるようにする。 ・脱いだものをきめられた場所にしまえるようにする。	・身のまわりのよごれたことに自分から気づき，先生に知らせるようにする。	・自分の名前を呼ばれたら返事をはっきりするようにする。 ・簡単な約束を守ることができるようにする。 ・先生に言われれば，1日の生活の流れによるきまりがだいたい自分でできるようにする。

表7　　　　　　　　　　あ　そ　び　の　内　容（まとまってするあそびを含む）

第1期　2才児は個人あそびが中心の時期であるので，保育園においても，ほとんど自由な形態で保育がすすめられてゆく。
食事のような集団行動を必要とする場合でも，第1期の前半は落ちつかず，椅子にじっとすわることができない状態である。
やや落ちつきを見せる5月中旬ぐらいから，おやつや食事の前後に，ごく短時間（5～10分）みんなでいっしょに遊ぶことができ，このあそびから，次第にまとまって遊ぶ時間が持てるようになってくる。

うたう，動く

・先生の歌にあわせて全く自由にうたったり，動いたりすることをよろこぶ。
うたう子もあれば，うたわないでみている子もある状態であるが，いずれも興味を示してついてこようとする。
先生は，はっきり，正しく歌うことが大切である。

ちょうちょ　　　（ちょうちょ　ちょうちょ　なのはにとまれ……………………）
むすんでひらいて（むすんで　ひらいて　てをうってむすんで……………………）
チューリップ　　（さいた　さいた　チューリップのはなが………………………）
ひ　よ　こ　　　（ひよこが　にわで　ピヨ　ピヨ　ピヨ　ピヨ　ピヨ　ピヨ……）
ぞうさん　　　　（ぞうさん　ぞうさん　おはながながいのね……………………）
お　う　ま　　　（おうまのおやこは　なかよしこよし……………………………）

みる，きく

・簡単なよく知られている紙芝居などをみてよろこぶ。
紙芝居だけでなく，ペープサートのようなものも好まれるが，いずれも，筋よりも動物が出たり動いたりするそのものに興味を示している。
先生は子どもの顔をよくみながら，話しかけるように話をすすめてゆくことが大切である。

三匹のこぶた　　　　七匹のこやぎ
おむすびころりん　　あかずきん

・小鳥，小動物，金魚などをよろこんで見る。
泣いていた子も，見ているうちに気分転換してあそべるようになることがある。

自由なあそび

・安定して一人あそびができるように玩具を充分にととのえるようにする。
・一人あそびができるように先生が仲間入りしてあそぶようにする。

第2期

うたう，おどる

・先生に「うたをうたって」と要求する。少しむずかしい歌でも，よろこんで何度も何度もうたってもらいたがり，自分の知っている部分だけいっしょに声を出してうたう。子どもにきかせるうたを先生は知っておく必要がある。

「うたのえほん」より

ぶらんこ　　　　　（ぶらんこ　ゆれて　おそらがゆれる……………………）
おはなしゆびさん（このゆび　パパ，ふとっちょパパ…………………………）
ふしぎなポケット（ポケットの中にはビスケットがひとつ……………………）
ふうせん　　　　　（あかいふうせん　あおいふうせん………………………）

・リズムにのって身体を動かす。
動物の動き（あひる，くま，ちょうちょ……）をしたり，みんなで汽車や，いもむしになって行列してまわることをよろこぶ。
先生は簡単な即興の曲がひけるようになることが望ましい。
・毎日つかう生活のうたをうたったり，それに動きをつけてよろこぶ。

おはようのうた　（おはよう　おはよう　おはよう　せんせい……………………）

手を洗いましょう（おててを　あらいましょ　きれいにしましょ…………………）
おへんじ　　　　（たいこのおへんじ　ドンドコドン………………………………）
おかたづけ　　　（おかたづけ　おかたづけ　さーさ　みんなで…………………）

先生といっしょに動くことが好きで，先生の模倣をしたり，手をつないで歩きまわったりする。先生は子どもの中に入っていっしょに動くことが必要である。

つくる，かく

・粘土あそびが大好きで10～20分はそれに集中する。
　だんご，おかし，へびなどをつくったり，まるめたり，ちぎったりする。
　紙をやぶったり，まるめたり，ちぎったり，いろいろもてあそぶ。
　まとまったものにできないが，素材をいろいろにもてあそぶことに興味をもつ。
　おはじきをならべたり，小型のブロックをつないだりする手先きのあそびも好きである。
　フィンガーペイントなどで，手がたをつくったり，指先きではんこあそびなどをする。
　クレヨンで自由にかく。

簡単な集団あそび

・ルールにはあわないが，いっしょにすることを好み，手をつないでぐるぐるまわるようなあそびがすきである。

ひらいた　ひらいた（ひらいた　ひらいた　なんのはながひらいた…………………）
かごめ　　　　　　（かごめ　かごめ　かごのなかのとりは…………………………）
子どもの王様　　　（きれいなまるい　わのなかに………………………………………）

みる，きく

・絵本をグループになってよんでもらう。
　絵本への集中は紙芝居より，ややおくれるが，次第に落ちついた興味に発展してくる。
　　動物の絵本，乗物の絵本，童話絵本など

自由なあそび

・わけあったり，いっしょにあそんだりできるような玩具を加える。
・玩具をゆずったり，わけあったりする時に必要な言葉や行動の型をおぼえるようにする。
・あそびがとぎれたり，衝突があったりする時には，先生が仲間入りして遊ぶようにする。

第３期

戸外遊具のあそび

ブランコ…………箱ブランコ，向きあってこぐブランコが好まれる。
大鼓橋鉄棒…………ぶらさがったり，先生に支えられてまわったりする。
平均台…………先生に手をつないでもらって横あるき，前あるきなどする。
ジャングルジム……のぼったり，おりたりしながらあそぶ。

・子ども自身充分注意してはいるが，常に先生が，そばでみていることが必要である。

うたう，おどる

・先生の歌をききたがる。
・自分の動きたいものを先生にひいてもらいたがる。
・リズムのはっきりした歌に合わせて，拍手したり，動いたりする。

しあわせなら手をたたこ（しあわせなら手をたたこ………………………………………）
手をたたきましょ（手をたたきましょ　タンタンタン……………………………………）

つくる，かく

・この期ごろから個人差はあるが，課題に対して，とりくもうとする気持ちがみられてくる。また自分で何をしようという目的を少しずつもって活動することができる。
　キャラメルの箱をつないで汽車をつくる。
　空びんに着物をきせて人形にする。
　小石を紙につつんでお菓子にする。
・はさみを使う，のりで貼ることに興味をもってくる。

みる，きく
- 絵本のみかたが，こまかくなり，集中時間もながくなる。
  自分の好きな本を選ぶ，絵本をみながら話す，一生懸命にみる，などみる態度ができてくる。
  （子どもがはじめてであう絵本）
- めずらしいものや，かわったものに興味を示し，先生にいろいろきくことが多い。

自由なあそび
- 個々の子どものあそびを互に結びつける役割を先生がするようにする。
- 先生が中に入らなくても，短時間2,3人で仲よくあそべるようにする。

第4期

うたう，おどる，ひく，きく
- うたにあわせてハンドカスタ，スズなどで拍子をとってあそぶ。
  みんなでたたいたり，一人でたたいたりしてよろこぶ。
  先生はリズムがはっきりし，歌詞でよびかけるような歌を選び興味をもたせるようにする。
  　手をたたきましょ　（手をたたきましょ　タンタンタン　タンタンタン…………）
  　がくたいあそび　（ピアノが ぽんぽんぽん ……………………………………）
  　小鳥がチッチッチッ（ことりがえだで チッチッチッ　ピッピッピッ ……………）
- 食後などにレコードをきくのをよろこぶ。それに合わせてうたったり，身体を動かしたりする。
  　お手々つないで（お手々つないで　のみちをいけば……………………………）
  　ゆりかご　（ゆりかごのうたを……………………………………………）
  　おひなまつり　（あかりをつけましょ　ぼんぼりに…………………………）
  　はるよこい　（はるよこい　はやくこい………………………………………）
- 新しいうたをうたいたがり，先生や友だちといっしょにうたうことをよろこぶ。
  テレビの「うたのえほん」などの中から簡単なものを選んでみるのも新鮮さがある。

つくる，かく
- ポスターカラーで大きな画をかく。
- 野菜でスタンプあそびをする。
- 多量の粘土で大きなものをつくり出す。
- 紙をきって自由にはる。
- 折紙を自由に折る。

みる，きく，はなす
- 紙芝居や絵本をみる場合に，画面の説明がなくても，ある程度そのすじに興味をもってついてくる。
- 先生のつくった簡単なおはなしをきく。
- 絵本を個人で興味をもってみ，絵本をみながらはなす。（きいたことをはなす）

集団あそび
- 玉ころがしなど，順番をまってあそぶものができる。
- 乗物ごっこ，買物ごっこ，動物ごっこなど，簡単なごっこあそびを友だちとする。

自由なあそび
- 2, 3人の友だちと，簡単なごっこあそびをしたり，模倣あそびをしたりする。
- 年長児といっしょに走りまわったり，ごっこあそびの一員に加わったりしてあそぶ。
- いいあったり，はりあったりする時は，その原因を双方にわからせるなかだちを先生がする。
- 楽しくあそぶためのきまりをおぼえるようにする。
  　玩具をゆずる。
  　順番を待つ。

保育園で、アンケートによる実態調査を行ない、一昨年実施した三才児の保育活動の調査（日本保育学会第十六回発表）と比較して、二才児の活動の内容を明らかにしてみた。

その結果を参考とし、あそびの内容を更に検討しまとめたのが（表7）である。

表8　　個別カリキュラム

環境構成			家庭連絡		行事		
項目＼氏名		A	B	C	D	E	F
健康安全指導							
生活指導	個人的生活指導						
生活指導	社会的生活指導（対人関係とことば）						
あそび	自然発生的						
あそび	意図的						

(四) 個別カリキュラム

以上のカリキュラムの内容は、二才児の一般的な基準を示すものであるが、実際にこれを活用する場合には、個別的なものが当然必要となってくる。

この個別カリキュラムは月案をかねたもので、個々の子どもの発達の記録と、活動のねらいを合わせたものが記入される。すなわち、基準に合わせてこの子がどうであるか。特に目立ったこと、指導を要すること、特筆すべきことなどを必要に応じて記入していくのである。

実際に記入してみると、社会的生活指導と自然発生的なあそびの指導とは、互に関連しあっており、また、ことばの指導（特にはなしことば）もあそびの中で指導されることが比較的多い。そのため、あそびの中でみられるこれらのことを（対人関係とことば）としてまとめ、その考えを表わした。

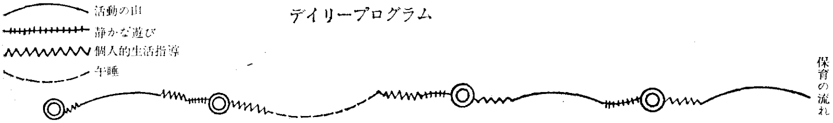
(五) デイリープログラム

保育計画にもとづき、日々の活動を展開していく場合には、そのデイリープログラムがしっかり立てられていなくてはならない。

デイリープログラムは生活活動量のさしひきを中心に組まれるものであるが、年少児になるほど、生理的要求を基に、無理のない流れをつくらなければならない。

二才児の場合は、おやつ、食事、それに午睡を集団行動の場とし、その前後に個人的生活指導の時間と、休息をかねた静かなあそび（受容あそびや静かな構成あそび）を考える。活動の山は、午前

デイリープログラム



時間	子どもの活動	保母の配慮
8.30	●登園、挨拶、視診、所持品の始末。 ●自由遊び 積木、絵本、スベリ台、その他の玩具で自由意志に基づいて個々にあそぶ。	●健康状態を母親よりくわしくたずねる。 ●家庭への連絡方法をたしかめる。 ●遊びの材料を使いやすいように整えておく。 ●泣いたり、手まねで要求を訴えないで言葉を使用するように指導する。
10.00	●片付け、用便、手洗、鼻汁の始末、洗顔 ●間食 絵本をみる、先生のうたう歌をきいたり、うたったりする。 ●自由あそび、またはまとまってする遊び。 粘土ですきなものを作る。 戸外で自由にあそぶ。	●一人でできるように、励ましの言葉をかけてやる。 ●動物、乗物の絵本をみせながら話し合う。 ●うたいたい子だけ自由にうたわせる。 ●作っているものについて、いっしょに考えてやる。できたものをみんなでてみる。 ●遊具の使用に注意する。
11.30	●片付け、用便、手洗い、鼻汁の始末。	●子ども同士の結びつきをよく観察する。
12.00	●昼食。 ●紙芝居をみながら休息する。	●一人で食べるように励ましの言葉をかける。
1.00	●午睡の準備 （用便、手洗、足拭き） ●午睡	●「おやすみなさい」を言って一人で静かに休むようにする。 ●室内の温度に気をつける。 ●家庭への連絡事項を記入したり室内を整えたりする。
2.30	●起床 用便、手洗い、洗面、整容	
3.00	●間食 お話、絵本による休息をとりながら、家庭からの迎えを待つ。	
3.30	●所持品を身につける 迎えのあったものから挨拶、帰宅。	●「さようなら」の挨拶がはっきり言えるようにする。
	●居残り児は迎えのあるまで自由遊び。 ●迎えのあったものから順次挨拶帰宅。	●危険のないように充分気をつけ淋しくないように心を配る。
5.00	●間食	●五時以後にまでなる時は間食が必要である。

中に二回あるが、子どもが落ちつきをみせる第一期の後半ごろから、第二の山に短時間（五〜十分）ながらまとまってあそぶ時間が持てるようになってくる。ここで、意図的なあそびが主に指導されるわけであるが、画一的な一斉保育の型にならないように、充分注意する必要がある。

また、保育の流れからもわかるように、長時間保育の場合は、五時頃にもう一度、間食または軽い食事を与えることが理想である。

このような生活時間の規則的な流れが、子どもの健康を守り、行動の自立性を促すたいせつな要素となっているのである。

また、二才児では、このデイリープログラムが最も活動の中心となるものであるから、具体的な内容が記入されるようにしなければならない。

なお、二才児は一才児とちがい、一組一本のプログラムで実施できるが、夏期と冬期で多少の時間の変化を考慮する必要がある。

（註）このカリキュラム及びその内容については、昭和三十八年に試案を作製し、昭和三十九年四月より一年間、名古屋市公立保育園十園において実施し、二才児担当の先生方の御協力により、毎月一回集り、検討補正したものである。

（名古屋市立保育短期大学）

幼稚園における科学的あそびの指導

山本泰子

一、はじめに

未来につづく科学時代に生きる幼児たちのために、自然についての生活をどのように指導すればよいかという問題については、教育要領の改訂においてもその内容が吟味検討されているものの、まだまだ未開拓の面が多いように思われる。私たちも、保育実践の中で常にこのことを反省すると同時に、これを子どもの活動に即して研究する必要性を感じていた。

こうした矢先、市教育委員会から研究指定をうけ、これを契機にこの研究にとりくむことになった。

本研究の内容としては、自然の指導書に示されてあるところ

1豊かな人間性をやしなう。

2科学性の芽生えをつちかう。

3生活に適応する。

のうち、「2科学性の芽生えをつちかう」に焦点をあてて、幼児の科学的な物の見方、感じ方、考え方や自然に対するかまえ方について、これを研究内容にとりあげた。

もちろんこのことは、当然豊かな人間性をやしなうことや、生活に適応する問題にも関連があることは、いうまでもないことである。したがって幼稚園教育要領に示されている「自然」指導目標のうちの

2身近な自然の事象などに興味や関心をもち、自分でみたり考えたり扱ったりしようとする。

3日常生活に適応するために簡単な技能を身につける。

4数量や図形などについて興味や関心をもつようになる。

を、その直接の研究の主な内容として考えることにした。なお、「1動植物を愛護し自然に親しむ」ということについては、これを研究の主な内容としてとりあげなかったが、自然に対する心情面も当然切りはなして考えることは実際にはできない。

さて、実際にこの研究を進めるにあたってまず幼児のありのまま

表①

あそびの種類 ＼ 月別		4	5	6	7	9	10	11	12	1	2
年間を通してのあそび	積木あそび	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	組木あそび	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	磁石あそび	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	砂場あそび	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	虫めがね	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	ボールあそび		—	—	—	—	—	—	—	—	—
	紙ひこーき		—	—			—	—	—		—
	ボーリングあそび				—	—	—	—	—		—
	なわとび		—	—			—	—	—		—
	洗濯ばさみの構成		—	—	—	—		—	—	—	—
時期的に出現しているあそび	しゃぼん玉			—	—						—
	プラレース			—							
	舟つくりと舟あそび				—						
	さかなつり				—						
	モビールあそび				—						
	水ぐるま				—						
	水でっぽう				—						
	どんぐりごま・ふえ					—					
	木の葉あそび							—			
	反射あそび					—					
	とばしっこ						—				
	風車							—			
	こままわし								—	—	—
	はねつき								—	—	
	トランプ								—	—	—
	凧つくり								—		
	糸まきぐるま									—	
	糸まき人形								—		
	やじろべえ									—	
	らっかさん									—	
	幻燈機									—	—
	テープレコーダーつくり										—
	あぶり出し								—		
	うごくおもちゃ（のりもの）										—

（あそびのでてきた期間を実線で表わす）

の姿をしっかりつかむことが、指導の第一歩であり、一番大切な基礎となるものと考え、幼児の科学性の芽生えがどのようなあそびの姿でみられるか、その実態を子どもの行動記録の中からひろって概観してみた。次にその主な研究の一端を報告することにする。

二、本園における科学的なあそびの実態とその考察

A 年間のあそびの分類

私たちがここで述べる「科学性の芽生え」とは教育環境の中に準備されているいろいろな素材（遊具・材料など）を用いての活動において、不完全な形ではあっても、幼児なりに、科学的な見方、考え方や、科学的な処理があそびの中でみられたものを意味し、これを「科学的なあそび」とよぶこ

とにした。観察の結果、科学的なあそびと考えられるものを整理してみると表①のようになる。

①一年間を通じてあらわれているあそび

実線でみるとわかるように、このあそびを大きく分けると、年間をとおして出てくるあそびと、時期的に出てくるあそびに分けることができる。ボールあそび、紙ひこーき、ボーリング、なわとびなどは、とぎれている月もあるが、大体年間をとおして出現している。

「洗濯ばさみの構成あそび」があがっているが、これなどは、私たちが思いもかけないもので、数量や図形などについての興味や関心のあるあそびをしていた。

このような年間を通じてあらわれているあそびではどんな傾向のものが多いかと考えてみると、その一つは、季節などに関係なく、遊具や器具を使ったあそびである。

いま一つは環境の条件をととのえることによって、いきいきとするあそびが多いように思われる。一例をいうならば、磁石あそびでは、その種類や量の多少によって子どもの活動がいきいきしたり発展したりするということである。

②時期的にあらわれているあそびの種類

その多くは下の表②にみられるように、a季節的、b行事的、c環境と素材によるもの、d偶然発見によるものに分けることができる。

表②

	あそびの種類とあそびのあらわれた時期	あそびの動因とみられるもの
季節的なもの	しゃぼん玉　水車　水でっぽう　船あそび 魚つりあそび（五月末—六、七月）	水に親しむ機会が多いことから
	どんぐりごま　どんぐりぶえ（九、十月） 木の葉あそび	秋の植物に関心をもったことから
	風車（十一月） らっかさん（一月）	秋から冬にかけての季節、風に関連して
	あぶり出し（十二月） 幻燈機あそび（一、二月）	冬季の火や電燈、電池などに関心のあることから
	うごくおもちゃ作り（二月）	冬期の室内あそびと関連して
行事的なもの	モビールあそび（七月）	七夕まつりの飾りから考え出す
	凧つくり（十二月） はねつき（十二月—一月） こまつくり　こままわし（十二月—一、二月） トランプあそび	お正月のあそびと関連して
環境と素材によるもの	プラレース（六月） とばしっこ（十月） 糸まき人形　やじろべえ（十二月） テープレコーダーつくり（二月）	保育室の各コーナーにしつらえられた素材を自分でえらび出して
偶然発見によるもの	反射あそび 糸まき車	あきかんのふたにおひさまがうつったことから

これらのあそびの中でも、特に季節的な動因によると思われるあそびは、その種類も多く、また多くの子どもが大へん興味をもってあそびに参加しているということがわかる。

以上年間にあらわれた科学的あそびの考察をまとめてみると、科学的なめばえは、常に子どもたちの身近な日常生活の中に充分見られるということであり、その芽生えのよき指導の教材として、夏、秋、冬の季節を背景とする興味の中心をみのがすことができないということである。

また、ことばをかえれば、幼児がいかに自然そのものに融合して生活し、自然とのまじわりの中に科学性の芽生えの契機が大へん多くあるといえる。この点、もっともっと幼児をじかに自然にふれさせなければいけないし、またどのようにふれているかをもっとよく理解し、これを援助しなければならないと思った。

B　活動の様式

私たちが科学的なあそびとしてとり出したものを活動の様式について考察してみると

1構成的な活動、2製作を中心とする活動、3実験観察を中心とする活動、4ゲーム的な活動、の四つに分類できるように思う。

特にこの中の実験観察活動については、幼児のあそびの姿をよくみると、構成あそびや製作あそびそれ自身がすでに実験し、観察などしてとりくんでいるように考えられる。

これは実験観察あそびだと言葉の上ではっきり分けられない面がたくさんあるが、特に実験し、観察することそのものずばりであそびをしているもの、たとえば虫めがね、しゃぼん玉、水でっぽう、反射あそび、はねつき、こままわし、あぶり出し、などを実験観察活動としてまとめることにした。

しかしながら、このように活動の様式によって考察をこころみたものの、活動の様式が先に述べたように、製作活動と実験観察とがなかなか明確に区分して考察することができないということである。

一般的にいえることは、子どもたちが、身近な素材を工夫して使ってあそぶ中にも、科学性の芽生えの契機が大へん多くみられるということがよく分った。従ってこのことから幼児の活動について子細に見てみると、構成あそびや製作あそびの中で充分科学的なあそびをしているとも考えられるということである。つまり幼児の一つの活動の中には絵画製作的なものとしてねらうものと、自然に関するものとしてねらうものとの二つの内容が未分化の状態でみられ、当然総合的な指導をしなければならないという、幼稚園教育の特色が、このことからも、よく理解できるのである。

すなわち、幼児のあそび（教材）を指導する時、常にあそび（教材）の重層構造をよく考え、簡単に「このあそびは絵画製作の活動だ」とかたづけないで、「自然」に関する目標をも、そのあそびの状況によってしっかりもって、常に多角的に子どもの活動をみ、指導することも大切だと思う。

三、科学的あそびの動機とその指導上の留意点

あそびの指導においては幼児の興味や関心を動機として、幼児が真の興味や関心がもてるように援助して、それを強めたり発展させたりしなければならないと思うが、特に科学的なあそびの場合には、その動機を見のがすことはできないと思う。

同じあそびをしても、その動機が同じだとはいえないし、逆にその動機が同じであっても同じあそび方をするとは限らないと思う。そこでこれについて考察してみると、次の四つに分けられるように思う。いろいろ例はあるが、紙面の都合上、主なものだけについてあげる。（57頁〜60頁参照）

A　内面的な探求欲求が動機となるもの

①物的環境（素材）によって、内面的探求欲求が働くと思われるもの

例　磁石あそび（57頁参照）

磁石という素材に対して、「これは何だろう」という探求欲求からはじまり、いろいろな金属類がひっつくということが分ると、この性質を使ってあそびを発展させて行く。

②過去の直接経験が直接その動機となったと思われるもの

例　磁石の人形あそび（57頁参照）

すでに磁石の性質やその作用について体験している。空箱や画用紙で人形やのりものを作り、その下に磁石をとりつけて、画板をとおして磁力が作用するので下から磁石でうごかしてあそぶ。

③製作的欲求そのものが動機となると思われるもの

例　テープレコーダー作り

ある男児がこれをつくりたいから、リールがほしいと素材を求めた。家にテープレコーダーがあるが、まだ小さいのでいためてはと家人がさわらせてくれないので、自分で作ってあそぼうと思った。

B　偶然的な発見などが動機となるもの

①素材をいじっているうちに、偶然起こったことがらが動機となるもの

例　反射あそび

たまたま手にしていた空かんのふたに日光があたり、反射したのを発見し、いろいろなふたで反射させて、光のあて方によりうつるところの違うことを発見する。

②あるあそびをして失敗したのが動機となり、他のあそびに変化したもの

例　ヘリコプターあそび

C　間接的な経験が動機となるもの

①テレビを視聴して自分でためそうとしたもの

例　あぶり出し（58頁参照）

テレビをみて、「自分も明日してみよう」といって、早速翌日み

遊びの種類	活　動　の　す　が　た	科学的な見方，考え方	考　　察
積木あそび	○高くつむ ○広くならべる ○傾斜をつける ○大，中積木を組合わせて使う ○他の遊具を組合わせてあそぶ ○△形積木を利用してあそぶ （シーソーあそび，ミシンのふみ板等） ○他のあそびに必要なものをつくる	○大小によってつむ順序を考える ○たおれないように，バランスを考える ○より高くつむため，底面積を広めたり，補助材料（椅子）を工夫して使う ○いろいろな遊具の組合わせ方を工夫する ○支点の位置によってつり合いを考える	最初は個々の子どもが数量も少く，単純なあそび方をしていたが，それぞれの力を出し合って協力し，構成あそびをするように発展した。ただ箱積木は形が限られているため，発展にも限度があるが，形も複雑になり，安定を考えて，積木だけのあそびから，材料の特性を考えて他の遊具を併用して効果的にあそべるよう工夫するようになった
砂場あそび	○砂をほる ○バケツ，空かん等に砂をつめ，ひっくりかえす ○できたものをならべていく（おまんじゅう等） ○水を流す ○川をつくる ○高くつむ（山） ○スコップでたたく ○トンネルをつくる ○汽車をとおす ○砂をふるいでおとす ○美しい砂でセメントこねをする ○美しい砂をままごとあそびにつかう ○草花，木等をつかって美しくかざる ○砂を高くつんだり，低くしたりして管を使い水を流す ○池をつくる ○管の上へ砂をのせる ○セメント，ブロック，といを使って傾斜をつけ，じょろを使って水を流す（ダムつくり） ○水が流れて砂がおちるので何べんもやりなおす ○水の流れるところへ道をつける ○あそびの役を分担する （ほるもの，砂をもるもの，水はこびをするもの等）	○容器によっていろいろな形ができることを知る（湿度，かたまり方によって） ○水が浸透していくことを知る ○底面積が広ければ高く砂がもれることを知る ○かたくたたいていけばこわれにくいことを知る ○水によって土がほれたり，流れたりすることを知る ○各自の力，興味によってあそびの分担を考える	砂という材料の性質から思いのままに構成することができるので，子どもたちの工夫創造力を豊かにすることができる 補助材料（水，その他）を加えることによって，材料の性質を一層認識することができた
磁石あそび	○いろいろなものをひっつける ○（釘，クリップ，ヘヤピン，押しピン，かん，びんのふた等） ○本を間にして上下で動かす （小さいじしゃく） ○木板を間にして上下で動かす ○プラスチック容器の中で動かす ○せとものの上で動かす ○いくつも磁石をつないであそぶ ○間にする本，板等を段々と多くしていく ○ゲームあそびにつかう （ブリキ板の上） ○ひもの先に磁石をつけて，高くからつりさげ，下のものをつる （びんの口金，かんのふた等大小いろいろ） ○魚つりあそびにつかう ○（魚の口に磁石につくものをつける） （魚を水の中へ入れてつる） ○モビールあそびをする （割ばしの両はしに洗濯ばさみをつけ，磁石でつないでいく） ○玉とりあそび （相手の陣地から，はやく，沢山ひっつけてかえる） ○空箱やこわれた玩具につけてうごかす ○人形をつくり，下からうごかす	○金物の中に磁石にくっつくものと，つかないもののあることに気づく ○物をとおして，ひく力のあることを知る ○ひっつくところと，ひっつかないところのあることに気づく ○同じ方向につながらないことに気づく ○はなれていても磁力のはたらくことを知る ○重いものと，軽いもののつり上げ方を工夫する ○磁力のつよさに関心をもつ ○水の中でも磁力のはたらくことを知る ○両方の重さによってつり合いのとれることを知る	幼児の心を強くとらえ色々ためしたり，比べたりして驚きをもってあそぶことができる しかし，その原因を追求しようというような知的な疑問のもち方はあまりみられず，現象をそのままうけとめて，興味関心を深めていった 又その現象を応用していろいろなあそびへと発展することができた
虫めがね	○絵本や花をみる ○友だちの顔，自分の手，指先等をみる ○小さいものをみてまわる （金魚やおたまじゃくしのたまご，種子，絵本の字等）	○身近なものをみようとする ○物が大きくみえることを知る ○適当な距離でみるとはっきりみえることに気づく	器具に対する興味は深く，次々と経験を重ねてあそびの中へとり入れ，活用するようになった 観察や実験の基礎として適当な素材と思う

遊びの種類	活動のすがた	科学的な見方，考え方	考察
	○二つのめがねを重ねてみる ○虫めがねを利用して玩具をつくる（幻燈機等）	○反対にみえたり，小さくみえたりすることを知る ○いろいろなものを調べるのに都合がよいことに気づく	
あぶり出し	○テレビで見た後あそびをはじめる ○自分たちから材料を集めてくる（ローソク，みかん） ○園にある材料を一緒につかう ○ローソクで描く ○みかんの汁をしぼって，筆で描く ○いろいろな紙をつかう（画紙，更紙，半紙，包装紙等） ○ストーブの火であぶる ○火鉢の炭火であぶる ○自分の持っているちり紙でする ○まほうみたいだと喜んでする ○家庭へもち帰ってやる	○知識としてもったものをすぐためしてみようとする ○材料の質によって描き方のちがいを考える ○材料の質によって出方のちがいがあることを知る ○紙の質によって，よく出るのと，出ないのがあることに気づく ○火の質によって出方のちがいがあることに気づく	いろいろな材料でできることを，幼児なりの知識としてもっていたが，園ではローソク，果汁等で出来ることを体験し，認識を深めた只，時期的なもので，あそびの発展はあまりみられないが，身近な素材で科学的な内容をもつあそびができることを経験した
シャボン玉	○同じ調子でふく ○ストローの数をふやしてふく（ストローをかためて） ○ストローを長くつないでふく ○高いところへ上ってふく ○びんの口であぶくを出す ○水を加えて液の濃さをかえる（加減する） ○平面的なところ（机の上，手のひら等）へふきつける ○ゆっくりとふく ○早くふく ○いろいろなストローをつかう（口の形，大きさをかえる） ○うちわであおいだり，こわしたりする ○ふきくらべをする	○液の材料によって玉の出方のちがうことに気づく ○液の濃さによって，玉の大きさ，色のちがいができることに気づく ○光によって色のちがいのあることに気づく ○吹き方によって出方のちがうことに気づく ○早くふくと風に対する抵抗が少くてこわれにくく，大きいほど風に対する抵抗が大きなためこわれやすいことを知る ○管の太さ，口の形のちがいによって玉の出方のちがいがあることに気づく ○風によって動き方，とび方がちがうことに気づく	あそびそのものは，子どもに大変興味があり，大ぜいの子どもが喜んで参加し，長くつづけられた しかし材料は身近なものを使った単純なあそび方で，ストローの口等特に工夫してつくり出し，あそびを進めるところまでは発展しなかった 3学期になって少し材料を工夫してあそぶ子どもも出てきたが，時期的に長くつづかなかった（寒さ，つめたさ等によって）
紙ひこうき	○自分の知っているのを折る ○いろいろな材料で沢山折る ○折り方をいろいろかえる ○少し厚い紙を使う ○補助材料（クリップ，釘，セロテープ等）をつかう ○高いところへあがってとばす ○広い場所をさがしてとばす ○ならんでとばしっこをする	○折り方によってとび方のちがうことに気づく ○紙の質によってとび方のちがう事を知る ○とばせ方によってとび方のちがうことに気づく ○重さによってとび方のちがうことに気づく ○風の方向によってとび方のちがうことに気づく	製作活動を通した身近なあそびによって，どうしたらうまくできるか 友だちとの比較等によって，あそびの目的にあうよう，思考工夫がなされた
舟つくり 舟あそび	○色紙，包装紙等で二そう舟をつくる ○画紙で舟をつくる ○画紙に色をつける（クレパス） ○画紙の舟を水にうかせる	○クレパスに含まれている油性で水をはじくことを知る ○紙の質によって水の浸透力のちがいのあ	浮かせるという目的のために，いろいろためしたり，くらべたりして工夫する態度がよくみられた 幼児なりに，重心や浮力等も考え，又素材の性質によって耐水性のちがいがある

遊びの種類	活動のすがた	科学的な見方，考え方	考察
	○舟の上へ軽いものをのせる（キビガラ，びんのふた等） ○木の舟をつくる ○たくさんくぎをうつ ○フィルムの芯やパトローネ等たてる ○ひもをつけて床の上をひっぱる ○水にうかべる ○舟の上についている材料を多くしたり，少くしたりする ○いくつも舟をつなぐ ○空かん，びんのふた等で舟をつくる ○磁石で煙突をつけたり（フィルムの芯）何せきもつなぐ ○磁石で舟をうごかす ○セルロイド板でつくる ○きびがらで煙突をつける ○セメダインをつかう	ることを知る ○軽いものをのせても沈まないことに気づく ○釘のうち方を工夫する（釘が板からつき出ぬよう加減する） ○ペンチ，釘ぬき等の使方を考える ○うまく浮くよう工夫する（安定） ○動かし方を工夫する ○しずみ方をみて重さの加減をする ○接着剤の性質を理解する ○糊ではつきにくい材料，とれやすい材料であることに気づく	ことを認識した
凧つくり 凧あげ	○いろいろな紙で凧をつくる （画用紙，上質カラーペーパー等） ○ひもをつけてとばす（真中だけ） ○竹ヒゴをつける 四方に 対角線に ○ひものつけ方をいろいろかえる 両はしから 三方から 四方から ○足をつける 短い足長い足 一本沢山 上下へつける ○とばしてみて，足やひもをつけかえる ○何回も新しいものをつくる ○戸外へ出て走りながらとばす ○友だちと競争する	○紙の質によってよくあがることに気づき丈夫なことを知る ○竹ヒゴをつけることによる紙がピントはりしっかりすることに気づく ○ひものつけ方をいろいろ工夫する ○セロテープの使い方を工夫する ○足の長さ，重さによってあがり具合のちがうことに気づく ○長くしたり，短くしたりして工夫する ○風の方向によってあがり方のちがうことに気づく	時期的に限られたあそびであるが，子どもなりに重さや風の方向，風の力等考えて目的にかなうよう工夫した特にセロテープの粘着力を考えて，効果的に利用することができた
こまつくり こままわし	○厚紙でこまをつくる（空箱，ボール紙等） ○他の材料でこまをつくる （牛乳のふた，フィルムのリール，びんのふた等） ○しん棒をいろいろかえる （つまようじ，割ばし等） ○円板（紙）のまわりにきりこみをつける ○しん棒の長さをいろいろかえる ○しん棒の先を細くしたり丸くしたりする ○円板に模様をかく ○しん棒が円板からぬけないようセロテープでつける ○自分のつくったこま，科学ごま，らせんごま，木ごまをまわす ○ひもの長さをいろいろかえる ○まつたけまわしをする ○机の上，手のひらの上でまわす ○ひものかけ方をいろいろかえる ○粘土入れのふたの溝の上でまわす ○友だちとまわし競争をする ○こまと他の材料を組合わせてあそぶ（リール） 洗濯ばさみ モーター	○よくまわるよういろいろ工夫する （しん棒を中心にする） ○しん棒の長さによって安定度のちがいのあることに気づく ○模様のかき方によって色がまざったり変ったりみえることに気づく ○しん棒が円板と固定していないとよくまわらないことに気づく ○よくまわるとこまの形が大きくみえることに気づく ○まわし方を工夫する ○まわす場所によってまわり方のちがうことに気づく ○重さによってまわり方のちがう事に気づく ○モーターの動きに関心をもつ	単純なあそびと考えられていたが，幼児は実によく，次々と思考工夫し，あそびを発展させた ありふれた素材を活用し，工夫することにより，科学的内容を持たせることができるものである 科学性を培う上に適当な素材であったといえよう
ボーリング あそび	○机の上へ糸まきをならべる ○少し距離をあけて糸まきをころがす ○糸まきをたおす ○糸まきを高くつむ	○まとのおき方，つみ	素材の性質から，ころがしたり，つんだりしているうちに，数量や力の入れ方を工夫してあそび，自らルー

遊びの種類	活動のすがた	科学的な見方，考え方	考察
	○マジックつみ木を一列にならべる ○ゴムボールをころがして倒す ○ボールをきつく投げて倒す ○マジックつみ木をたくさんかためておく ○マジックつみ木を高くつむ ○ボールをなげる距離をいろいろかえる ○ボールの投げ方をいろいろかえる ○たおれた数をかぞえる	方によって倒れ方のちがうことに気づく ○ボールのころがり方によって，まとに当たる力のちがうことに気づく ○ボールを扱げたりころがしたりする力の入れ方によって，早さのちがうことに気づく	ルをきめて，ゲーム的なあそびへと発展することができた

糸まきぐるま

時期 月日	場	動機	参加人員	幼児の活動（C＝幼児・数字＝活動の順序）	幼児の感じ方・見方・考え方と教師の助言
1. 21	保育室	材料置場の中から糸まきをみつける	1名（男）	C 1 糸まきをみつけ，何か考えている	
				C 2 「先生ゴムないか」	T 「何かつくるの」
				C 3 教師のそばへやってくる	T 輪ゴムを出す
				C 4 割箸をさがし，輪ゴムと糸まきをもってやり出す	
				C 5 糸まきの穴に輪ゴムを通そうとする（手で）	
				C 6 中々通らないで苦心している	C 6（細い穴へゴムを通すことに苦心し，自分自身で通し方を発見する）
				C 7 材料かごの中から針金をさがし出す	
				C 8 針金の一方をまげ，ゴムを通して穴へ通す	
				C 9 割箸を折り（1本は長く，1本は少し短く）両はしへ通す	
				C10 長い方の棒を指でくるくるまわして床の上へおく	
				糸まきが少し動くがすぐゴムがきれた	（ゴムの弾力が動力になって働くことを知る）
				C11 ゴムを2本にしてやりなおす	（ゴムを多くすると力が強くなることに気づく）
				C12 ゴムを通すことは上手にできた くるまがよく走るので喜ぶ 「よう，はしるぞ，みてみナ」 ゴムをまきながら教師にみせにくる 「先生みてみ，はしるで」 「このゴムをまいとくとはしるのや」	T 1「上手にできたね，どうしてそんなにはしるの？」
				C13 何べんも動かしてあそぶ	
				C14 ローソクをとりにくる 「ローソクないか」	T 2「ローソクなんか，どうするの」
				C15 糸まきのまわりへローをぬりながら 「ここへぬっとくとようはしるのや」	
				C16 何回もまわす	
			3, 4名	（他の子どもがそばからじっとみている）	
1. 22			2名	C17 昨日の糸まきぐるまを出してあそぶ	
				C18 ゴムをきつくまいている （糸ぐるまがきりきりまう） 「ゴム1本とちがうか，2本やないとあかんぞ」	（わからない友だちに自分の経験をおしえてやる）

時期 月日	場	動機	参加人員	幼児の活動（C＝幼児・数字＝活動の順序）	幼児の感じ方・見方・考え方と教師の助言
1. 23			5名	C19 何べんもやりなおす 「あんまりゴムをきつうまいたらあかんわ」	（ゴムをきつくまけば，よく走ると思っていた）
				「ゴムがきれるぞ」「くるくるまわりするやろ」 C20 ローソクを1cm 位のあつさに切ってはめる （あまり動かないようになった）	（きつくまきすぎてはいけないことを知る （ゴムのまき方，回数によって進み方のちがうことに気づく）
				「おかしいなあーうごかへん」「まわるはずやのに」	動かない原因をつきとめようと工夫している
				C21 他の子どもがフィルムの金具でつくる （走らせるがすぐとまる） 何回もうごかすがとまるので不思議そうにながめていて，やめてしまう （他の子どもが見ていて） 「あっ，ここが出たるしとまるのや」 ここでとまる C22 材料をかえる 「これはあかんなあ」	（同じような形の材料でも，適当なものと，適当でないすののあることを知る）
1. 25				C24 くるま，棒に美しく色をつける	
1. 28			3名	C24 家でつくったくるまをもってくる C25 家から材料をそろえてもってくる （走らせるがうまく走らない） C26 いろいろな角度からみたり，ゴムをまいたり，伸したりしている 「前につくった時，ようはしったのに，何でやろ」 C27 ゴムを4本にする	（家庭でも園での遊びをつづけ，又園へと延長している）
1. 30			4名	（あまりうごかないのをみて） 「棒に色をぬったら，うごかんようになったわ」 「そんなもの色みたいな重いことも，軽いこともないわ，関係ないぞ」 C28 ゴムを2本にへらす （いろいろやっているうちによく走り出した） 「あーよう走るようになったわ」	
				C29 一人で3こ程かかえている C30 自分のひきだしへかたづける 「先生，もうくるまの研究おわりや」	（充分，工夫，実験して成功した事に満足感をもった）

かんを持ってきて実際にためしてみる。

②絵本をみて自分でやってみようとしたもの

例　らっかさん

D　人間関係が動機となるもの

例　凧つくり、糸まき車、しゃぼん玉、舟つくり、風車あそび、など（58頁〜61頁参照）

友だちの刺激によるものである。また、「風車あそび」は兄姉（低学年の児童）のをみて動機づけられたものである。

以上あそびについての動機を分けてみたが、どんな場合にも幼児はあそびの中でいろいろの科学的な体験をしながら、物的環境に働きかけている。

以上、このことから、指導上留意しなければならないと考えられることは、

(1)子どものあそびを自発的にうながし、自由な活動を伸ばしてやれるような環境（素材）あるいは望ましい科学的な体験が、充分達成されるような物的環境（素材）による動機づけについての工夫が、必要であると思われる。

(2)更に重要なことは、教師自身幼児のあそびの中に発生する探求欲求や、小さな科学性のひらめきにも気づき共感できるような敏感な洞察心をもたねばならないということであり、幼児と共に疑問をいだき、よくみたり考えたりできるような教師の態度や能力が大切であると思う。

四、活動の分析と考察

A　幼児が日常自然に関連した生活経験をどんな場所でどのようなすがたで科学的にとりくみ、その活動のすがたの中に科学的な要素をどの程度経験しているか、ということについて考察してみると、

①あそびにとりくむ態度

前述したどのあそびにも共通していえることは、あそびながら常にためし、しらべてまたあそびへと進めていく態度のみられることである。これは真剣に思考し、工夫していくのぞましい態度であると思う。

②あそびの発展

個々の子どもによって違いがみられ、多少能力の劣る子どもは模倣や単純なあそび方に終ることもあり、やや発展しにくいこともあった。ことに実験観察などのあそびについては、男児は興味や関心も深く、電気、機械類などに関する知識は大変豊富で、あそびの発展も著しく、教師が驚かされたこともたびたびあった。

③あそびの内容

数量や大小、軽い、重い、速度などをあらわす言葉や、動作のあらわれも、この時期には活発となり、比べたり、話し合ったりもしていた。また自分の思いつきから工夫して作ったものをためしてみたりしていた。

B　幼児たちはどのような科学的態度でとりくんでいるだろうかということについて考察してみると、

例　「糸まき車あそび」(60頁～61頁参照)

糸まきや輪ごむなどは、素材そのもの自体は特別科学性のある素材であると思わないが、組み合わせて使うことにより、科学的な内容をもった素材となり、大へん興味をもってとりくみ、あそびの過程でいろいろ疑問をもち、それを解決しようと最後まで工夫、努力する態度がみられた。

五、まとめ

幼児のあそびのほとんどは探求欲求からだということができると思われるが、いずれの形で経験するにしても、すべて身体のすべての感覚を総動員して集中し、統一のある活動の中で実験と観察がすすめられているといえる。

科学的なあそびといっても、高度の要求をするのではなく、五才児として興味をもって経験できるあそびの中で、幼児のもつ「これは何だろう」「どうしてか」という求める心やおどろきの中に科学的な芽生えがあり、物ごとをよく見たり聞いたり考えたりすることによって、正しい科学的な態度が育って行くものと思う。

また幼児の示す卒直なよろこびやおどろきなどは、できるだけ受容してやることが、特に大切であると思う。そして小学校へ行った時、これらの態度が基礎となって一層実のある科学的な態度が身についていくものと思う。

以上私たちが実践して来たことは、すでに過去においてどこの園でも経験されていることだと思うが、この事実は、志賀幼稚園の三年間における科学的なあそびの実態の主なものであって、今後も更にこの科学性の芽生えを実践の中で継続してとらえていきたいと思っている。

特にある時は子どもたちに教えられ、一緒におどろき、また返答に困ったりしながらその中で一人ひとりの子どもの中に芽生えていく科学性の成長の日々の変化をみつめてきたにすぎないのであり、やっと研究の手がかりを求めたにすぎない。

どうか多くの人びとのご批判やご指導をおねがいしたい。

研究者
大津市立平野幼稚園　山本泰子
〃　志賀幼稚園　中村緑
〃　膳所幼稚園　川島エミ子
〃　志賀幼稚園　岡田玲子

本年は、倉橋惣三先生の没後十年の年である。

先生の幼児教育界にのこされた業績は、きわめて大きいのであるが、最近、その著書が絶版になっていたので、今回、倉橋惣三選集として、三巻になってフレーベル館より出版されることになった。これは、私ども幼児教育関係者にとって、たいへん嬉しいことである。先生の書物をよまれるならば、心の中にまたあらたに、幼児を見る眼を開かれるであろう。幼稚園、保育園、ひろく幼児教育にたずさわる方々に、必読の書としておすすめしたい。

この夏には、また、倉橋惣三先生の業績を記念して、お茶の水女子大学で行なわれた、日本幼稚園協会主催の定例の夏の講習会で、「倉橋惣三の思想と生活」と題して、講演が行なわれた。

七月二十二日の第一日、及川ふみ、津守真、七月二十三日は、山下俊郎、七月二十五日は、坂元彦太郎の諸氏により、それぞれの立場より、興味深い講演であった。

本号では、このうちから、及川、津守の二つの講演を掲載し、あわせて、それに関連して、初期の誘導保育の実践記録を二篇掲載した。これはいずれも、大正七年、大正十四年という、きわめて古い時代のものであるが、その当時としては、よくもこれだけ新しい感覚でなされたものだと感心する。いま読んでも興味深いものであると思う。

＊　＊

いま、この後記を記しているのは、暑い夏の最中で、蟬の鳴声が耳の底にまで響いている。これが読者のところにとどくのは、もう、涼しい風の吹き渡る気持ちのよい季節であろう。汗をふきふき、講習会や研究会に参加して忙がしくするのもよいが、ゆったりと静寂をたのしむ時間も、努めればだれにでも与えられるものであると思う。

心しずかに、幼児に接する態度を練ることも、私どもにとって欠くことのできないものであろう。

幼児の教育　第六十四巻　第十号

十月号　©　定価六〇円

昭和四十年九月二十五日　印刷
昭和四十年十月　一　日　発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五
印刷所　凸版印刷株式会社

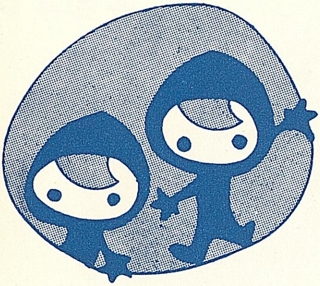
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

フレーベル館の

現代幼児教育研究会

＊新しい形の幼児教育講習会です



10月（大阪）例会の　ご案内

日　時　10月24日（日）　9時30分～16時
会　場　大阪市　　大阪女学院
　　　　（大阪市東区東雲町２丁目）
内　容　午前―全体講座　午後―分科会
講　師　三木安正先生　　山村きよ先生
　　　　中島　修先生　　藤田妙子先生
会　費　200 円（資料代ほか）

■詳細は、フレーベル館本社、または
関西支社へお問い合わせください。

株式会社 フレーベル館

幼児のための紙芝居です

●’65年度幼児テキスト紙芝居全集第７回配本中

年少向

ぴんきーのがっしょうたい

￥380　　画・森国トキヒコ

年長向

う　さ　ぎ　の　つ　の

￥380　　画・中村千尋

名作12集

赤んぼうになったおばあさん

￥380　　画・小谷野半二

東京都渋谷区千駄ヶ谷５―17（振替東京 29855）
TEL（341）3400・3227・1458

株式会社 教育画劇

美しい絵と格調高い文章で
幼い心にロマンと感動を誘う
決定版!!
全12巻完結
各巻490円
トッパンの 絵物語 シートン動物記
1 オオカミ王 ロボ
2 灰色グマ ワーブの冒険
3 ぎざ耳小僧
4 銀ギツネ物語
5 峰の大将クラッグ
6 あぶく坊主
7 裏まちのすてネコ
8 かしこくなったコヨーテティトオ
9 旗尾リスの話
10 北極ギツネ
11 クマ王物語
12 サンドヒルの牡ジカ物語
Ishi
凸版印刷株式会社印刷